

あるいは現在進行形の黒歴史 — 殺戮天使が俺の嫁? —



あわむら赤光
ヤバベイ・refeia

試し読み体験版

堕天使マザー? ミカエルの剣 能力者 吸血鬼
貌の天使 の天使 能力者
殺戮の天使 の天使 能力者
マリスたん ハアハア

中二天国タコレ!

エジェリックコード
契約者 純愛
絶対少女黙示録

「(・ー・)」
わたくみの海姫

これが俺の妹の妄想力だというのか……!
ヤンデレクーデレ
GA文庫



「……榎原はづく、英二^{えいじ}を好きになつたの？」

いきなりマリスたんにこんなことを訊かれて、あたしはむかへつした。

びひべつしたんだけど、他^{ほか}なるマリスたんの質問なる全力で答へなつじタメハシゅ。

じごりわけで、あたしは榎原。

「、そうだな……。

元々あたしはお兄ちゃんがいたし、ハーフハーフで周知の事実だつたんだけ——

はつせつ「好きだなー」つて呟いたのはあの時かなあ？

去年が、中学入つてしまふ前^{まへ}、新しくできた友達の間で「ハーフハーフ」で遊ぶのが流行^{はや}ったのよ。マリスたんは知つてゐる、「ハーフハーフ？」とカベとカゲーのキャラと同じ服^{コス}着て、そのキャラになつたもの——樂しその——

「……それなら知つてこね」

あ、じゃあ話が早いね。幼馴染^{おなじみ}の舞子ちゃん^{まいこ}がそういう服^{コス}で持つてい、軽^{かる}いでもないのも流行つた理由かな？

んで、もう一つ皆の間で流行つてたものがあつたの。

あたしが布教した結果なんだけ（「じじ田慢ね？」、「ハーフハーフ」）ついでにハーフハーフが大流行^{はや}でさ。特に裏主人公って呼ばれる黒崎水城^{くろさきみずき}が「超カッコイイね」「憧れぬね」つて皆で悶^{もだ}えあへへへ。

ある時、おたし酔ひかやつたのよ。

水城の「ペペ」せせらぎ、「私の兄わやるる寝ぐらび奴」——
まあ、なんか半分翻して……。似ひゆのは田のもの悪さだけかな……。おこ全然違うし……。
でもまあ、そしたの皆が「見せて!…見せて!…」って大喜しそうなはじめだわ。舞うわやん
(幼馴染=兄わやるる面識) あと「似似のわも……」とか言つたかったわ。
もつ、引つ込みつかなくなつたやつたのよ……。

だから、あたし、行きましたー。兄わやるるペペのところに頼みに行きましたー。
かわいらしい笑顔を作つて、田舎の格好へつむかわせ、いろいろな仕種で行きましたー。
即、ぶたれましたー。

「へ……あの人、昔からおたしにたけ御赦ないんだ……。
「ザケンナ! いわゆる取扱いしてんだ。しかもそんないふかしい眞似(まね)できるかー!」
て怒鳴られたよ。

でも、そんないじめの極(きわ)めやつではあつたよ。
土曜だったしや。兄わやるる部屋に押しかけ、深夜まで説得しあつた。あわせ一巻
読んでみて。面白じかい。「やるか! あつたのやつは」たゞなるか。」「この魂(たまねぎ)
刻まれた、『孤独』の業(わざ)が俺をあた強くせしわ……」とか言つたくなのかいわ。舞うわや
んに借りた水城の衣装と一緒に、既刊全部無理矢理収(う)むかわ。

ああ、部屋からの呑(の)められた。

んで次の日、皆に失敗報告行つたのよ。お「わい」。近所の「アリス」。アチ☆コ☆アレ
パートナーの約束(約束)だつたから。
皆、いっ子だから。誰(だれ)も責めなかつたから。」「残念(まことに)」みだるなマーチガルビツカ(わ
あたしなんか「生き(いき)てスマセフ」状態(じょうたい)…

しかも、間の悪(わる)いことに重(ひが)いのよ。

なーんかガラの悪(わる)い三人組(さんぐみ)にナンバ(わ)れおやつわ。」「この服(はな)い髪(かみ)、おののこで可愛(かわ)い
くね、君(きみ)の姉妹(ねめい)」とか罵(のの)られ罵(のの)つ。「アリス」の九郎(くろう)がやさし聲(こゑ)のアリス(アリス)だつ
た。双子(ふたご)設定つただけ、おたしと舞うわやんは姉妹(ねめい)じゃなつてー。

じぶくもうサイシックな連中(れんちゆう)。

「へ、ヒローなとて皆(みな)い。どうせいつかはるさめつ。歌は一次元(かず)こなわ。三次
元(三次元)でアートキ(アートキ)なのよおやじだけ。

か、ほそつしつじに連中(れんちゆう)だわ。断つても聞かないわ。髪(かみ)とか肩(かた)とかわいいわ
泣(なみだ)いわや(わ)めで出(で)。キヨアツ(キヨアツ)な人相(あざ)てたから、店の人も知らんるつだ。
トイシ(トイシ)じなうしたわ、ほんほん。みだるなー。

「……殺せばいい」

いや、マコトだよ。それはダメだから。しゃんなりとかい。

ムカツクからひいてぐるぎのやごとなよ~ 樅かわやんじの約束。

「……わかった」

マコベたゞイイロ、イイロ。ナトナト。

「……樅かわ、やうし」

はつせど。じゃあ、ナトナトしながらお語りしよいね。

これでも困つてたといふ カシノーじ騎士ガの立つくれたのが兄わやくなわけよ。

「……結局、来てくれた~」

ハハハ~。兄わやくわ一、なにだかんだあたしと甘てかひやーとくくく。

可愛い妹が約束守れなく~ 友達の間で肩身の狭い悪こころむ心配したゞじやない

わやよと「ス」レかしふくれたしな。田髪のカシワは赤いカバのせむし、黒の「ホーマ着て

オモチヤの刀引つ提げましわ。

「……ソノチキな格好」

じやこじやこ。かわいこじわー。全然かわいこじわー。

それが水城の「スなさむ」。

「……したの? 英一が?」

したした。そのカツヒで大立を回つした。ムカツク三人並みにほした。

「……殺した?」

だかひ、殺さないつて! ヤバいつ! 普通にケンカして追い払はれただけ。もつひ

見た田せつかでこんで弱かつたかひ、兄わやくの敵じやなかつた。

しかわ兄わやく、水城の決め台詞セツシ言つた~。

「元素神の扉を開くもやなこ」とか言つた~。

「六聖六呂の争いにしゃしゃつてねば、人間じゆわ」ハハコハコの言つた~。

あんだけ嫌がつてたくせにむか二歳半で隠れてぶんやく~。ハハ感じたつた。

兄わやくとほそひ食わむ嫌いだかひ。誰に似たんだけ。

じやれ~。

ハハコハコの言つた~……カシワよかつたなあ~。

ハハ一回こいへだなこなあ~。

「……ルの時に好きになつた~」

ハハ、自覺したのは多分、その時などない想ひ。

兄わやくは、頭堅^{タフ}、口やかめしつこ、陰険だし、一見こぶしにやれぬのだかひ。優しつこ、おたしのいと大事にしつくね、ハガラクはせむかひのうめぐわいへん。

やがて、うん、大好きだなあ。

「……わかった。聞かせいいれど、おつがいひ」

いいよ、いいよ。おれなんていいよ。
お礼なんかいいから、今度はマリスたんの番だよ。
「……え？」
だーかーらー。わかるでしょ?
マリスたんはいつ兄弟やんの」と好きになつたのか、お・し・え・て?
「…………」
ハイ、だんまり禁止^{しゆ}。
「……笑わない?」
笑わないよ! あたしだって女の子なんだから、乙女心はわかるよ!
「……わかつた」
うんうん、それで?
「……あの日、私が——」

第一幕 新しい朝が来た。希望の朝だ。

夏休みに入つて三日が過ぎた。
俺——吉岡英一の朝は早い。今朝も六時起床だ。

中学時代のダチは皆、毎日昼まで寝てるらしい。少し羨ましい。ベッドの温もりに恋しさを覚える十五歳・高一。それが俺。

でも、「あと五分……」とかベタなことを言つていると、父さんにぶん殴られちまう。モタモタはできない。着替え、洗顔をさつさと済ませ、竹箒を持って外に出る。
父さんはとにかく抜けが厳しい。夏休みだからってだらしない生活態度は許してくれねえ。
俺は家の裏手にある神社(正確には、神社の裏手に家がある)に行き、境内の掃除を始める。
ふあ、寝む……。体、ダルー。

でも、これは心地よい疲労つて奴だ。充実感伴うつて奴だ。
昨日も俺、夜遅くまで勉強したからなあ。まったく学生の鑑^{かがみ}つて奴だよ。我ながら偉いよ。
なあ、そう思うだろう? フハハ。
俺はあくびを噛み殺しながら、テキパキと境内を掃き清める。慣れたもんさ。

こここの掃除は神主である父さんに命じられた、朝の日課なんだよ。

これに夏休み、クリスマス、バレンタインの時期はもう一つ仕事が加わる。

俺は神社の横手に行くと、

「ウヘエ……」

そこに奉納された山のような絵馬を見て、うんざりした。

うちが代々神主を務める、この葦原神社には本来戦いの神様が祭られている。

だけど、とある事情があつて今では恋愛成就、縁結びにご利益があるつてんで絶大な支持を得ている。おかげ様をもちまして、前述の三シーズンには洒落にならない数の参拝客がやってくるんだよ。もう、絵馬が飛ぶように売れるの。

何分小さな神社のことでござりますからね。絵馬を奉納する絵馬掛も小せえし、シーズン中は隙間もないほどびっしりと埋め尽くされてしまうんだ。それが問題なんだ。

これじやすぐにいっぱいになつて、新しく奉納できないだろ？ 古いものから順に毎日少しずつ、絵馬掛から外してかないとダメなわけ。

外したものはすぐさま、境内の端で焼納する。

淨めの炎（ぶつちやけ普通の焚き火）で焼

いて、天に納めるのが俺のもう一つの日課だった。

「しかし、よーもまー毎日これだけの絵馬が集まるもんだぜ。男と女の数はそんなに変わらんのだから、カップルなんざ人口の半分だけボコボコ生まれそくなものにな」

ぼやきつつも、恋愛の需要と供給は、バランスがとれてないことを重々承知している。
例えは、俺の妹はモテる。顔がいいから呆れるほどモテる。

ほら、コレ……この絵馬。

馬いっぽいにデカデカと「楓子」なんて書かれてると、嫌でも見えちまう。不可抗力だよ。絵馬

プライバシーに関わるから、書かれてあることは見ないようにしてんだよ、俺。

でもさ、絵馬の楓子つてのが俺の妹な。

この絵馬、奉納した奴も何考えてんだかな。百歩譲つてうちのバカ妹に懸想するのはいいとしてだ。その娘さんの実家である神社に、こんな目立つもん奉納する神経がわからんねえ。いつそラブレターでも書いて直接送つて来いよ。アグレッシブなんだか受け身なんだかわかりやしねえよ。

けどよ——信じられねえことに、この手の絵馬がころごろしてるわけよ。探さねえけどな。

それくらい、バカ妹のモテっぷりはハンパねえ。

「ま、どうでもいいか」

俺は目分量で一抱えほどの絵馬を外す。袋に入れるとけつこうな重量になるんだ。壁易しながら焼き場に運ぶ。

「しかし、おまえら……他にやることあるだろうに」

一枚一枚丁寧に焚き火へくべながら、俺は見知らぬ他人のことが心配になる。

（ほか）

（へきえい）

大人はわざわざ恋愛成就の祈願なんかしない。この山のような絵馬を奉納したのは学生だ。
夏休み中のアバンチュールを願つてゐるわけだ。

「どいつもこいつもバカだねー」。学生の本分は勉学だろうが。

おまえらが「××ちゃん（君）大好き」とか言つてゐる間に、賢い奴は机にかじりついて、おまえらを引き離しにかかるわけよ。この俺みたいに。

願い叶おうが失恋しようが、おまえらを待つてるのは不幸だけさ。

青春を謳歌したいって気持ちはわかる。そりや俺だつてわかる。

だけど、おまえらだまされてる。今は必死に勉強して、いい学校行つて、いい会社入つて、笑顔のかわい奥さんもらつて、幸せな家庭を築くための努力をする——その方が絶対いいって。考えてみろよ？ 青春時代なんてたがだか十年そこらだろ？ でも、俺らの人生はその後の方が何倍も長いんだぜ？

どちらに重点を置くべきか、効率いいか、火を見るよりも明らかさ。いやマジでマジで。

今は苦しくても耐えて、牙を研ぐ時期なのさ。俺はそう思うね。瘦せ我慢抜きに。

人間は性欲じやなくて理性で生きるもんなんだから。道理や理屈をわきまえないとな。

「さつて——」

俺は時間をかけて全ての絵馬を焚き火にくべ、帰宅する。燃え尽きるまではまだまだ時間がかかるが、今日は風が強くないので後は放つておいても平気だ。

朝の日課終わり。

裏口から家に入り、台所に近づくと、味噌汁のいい匂いが食欲を誘つた。

我が家の台所はいわゆるダイニングキッチンで、食堂も兼ねてゐる。八人がけのテーブルには既に父さんがいて、新聞を広げてゐる。

吉岡京平、三十九歳。

知らない人が見れば、「ひいっ、黒が座つてる！」と腰を抜かすこと間違いない風貌。

妹ともども母親似でよかつたと俺はいつも思う。

あんたが「京平」つて柄かよ、「凶兵」の間違いじゃないの？ とつくづく思つ。

「おう、御苦勞」

俺がテーブルに着くと、父さんは新聞を畳み、息子の日課の労をねぎらつてくれた。

心臓の弱い人が聞いたら、卒倒しそうなドスの利いた声で。

「楓子は？」

「まだ起きとらん」

額に青筋浮かべながら、忌々しそうにする父さん。

楓子には朝の日課はないが、「食事は一家そろつて」がモットーの父さんは寝坊を許さない。世の父親は息子に厳しく娘に甘いって聞くよな。だけど、吉岡家にそんな家風はない。拳骨だな。俺は妹の末路を憐れむ。

いや、自業自得だな。俺なんかは父さんを怒らせるようなことは絶対にしない。そう肝に銘じてんだよ。

あれは——五歳の時だったかな？

ちょっと遠回りになるが聞いてくれ。俺には四つ年の離れた兄貴がいる。俺に似ず、性格の悪いサディストだ。暴君だ。ゴリラのような体格をしていて、超つええ。

去年から遠くの大学に行つて、家にいない。おかげで俺は人生十五年目にしてようやく和平を手に入れた——ってまた話が逸れてら、悪い。

とにかくそのサドゴリラに、五歳の俺は反旗を翻した。今にして思うと、青かつたな……。兄貴が小学校に行つている間に、兄貴が大事にしていたM・G・ウイングガンダム・ゼロカスタムを裏山に捨ててきたんだ。日ごろいびられてる復讐で。

まあ、後でひどい目に遭つた。

庭の木にロープで逆さ吊りにされて、「人間サンドバッグだぜ」ってボコボコにされたよ。マジギレしてたんだろうな。兄貴、目が据わつててさ。殺されるつて思つたよ。で、頭に血をのぼらせた兄貴は、持ち前の狡猾さを失つていた。いつもは父さんらに見つからないように慎重に俺をいびるんだが、あの時はそういうの気にかけてなかつた。だから、父さんに見つかつたわけよ。「ずいぶん、楽しそうなことをしているな」つて。

俺、チビっちやつた。いや、父さんは兄貴を叱りに、俺を助けに来てくれたわけよ？ でも、俺をボコボコにした兄貴より、父さんの怒りの形相のが何万倍も怖かつた……。

当の兄貴なんかもう、大洪水よ……。

翌朝、俺の代わりに一晩中木から吊り下げられてた兄貴を見て、俺は幼心に誓つたね。ああ、上には上がない。俺は父さんにだけは逆らわないようにしよう——てな。

ちよつと話は長くなつたが、そんな父さんに怒られないように日々心がけているおかげで、俺は自然と品行方正な青少年になれたつてわけ。

だけど、楓子は性根悪いんだよなあ……。怒られても、怒られても反省しないんだよなあ。「英二、起こしてきてあげなさいよ」

母さん（名前は優子）が、茶碗にご飯をよそいながら言つた。

父さんが殴り起こす前に優しくしてやつてという助け舟だ。父さんと違つて娘に甘い。黒髪ロング、且つおでこを前髪で隠さない（時代とは逆行している）のがとても似合つ和風美人。もつとも俺にすれば、母親が美しかろうとその逆だろうとどうでもいいことだけどね。

毎日美味しいご飯を作ってくれることが重要なだ。正直、気色悪い……。むしろ、俺は思うわけよ。四十近いおばさんなのに、未だに巫女さん姿（仕事着）が似合うんだよ、この人。俺のダチにもファン多いんだよ。

「ええー、メンドクセえなあー

「そんなこと言わないの。お兄ちゃんでしょ？」

「どうせまた夜中までラノベ読み耽つてたんだろ？」
「悪いの、あいつじやん……」

備かふつぶつ云いながら次々席を立とうとする
と なま もの わざら

「アア……放つておけ セイシとしている英一が急に者のために煩わ

茶をすすりながら父さんが待つたをかけた。

さすが父さん道理でものかよくわかってるせ
尊敬するせ

卷之三

「これも楓子のためを思つてのことだ」

「活潑」

二十九

せつかくの威儀が台無しだ。

やめなさい 優子さん 英一が見ている

「二二、廿五」

「ふる」

「ああ、
八年してな

若いころで言いなきいよ、とはかくだから
あなたが立派なテフコメ野郎になつて
漫画みた

いが幸せな人生送って欲しいの そのための指導

氷川の裏面

「ゲンゲン。とにかくやめなさい」

だ
し
め
ち
ゆ
心

ケレホケホケホンニホンノホンビニシカホニホカホカハオイゲン

「二地三様一二六 二儀兼てお茶のうつりを窺していふ。二口無三。

まさに典型的な「美女と野獣」夫婦。

息子としてはそういうのは寝室でやつてくれと、非常にいたたまれない気分になる。

俺は現実逃避気味に、ダシからちゃんととつた味噌汁（美味）と鮭の塩焼き（親父）

とはいへ、仲睦^{なかまつ}まじいこと自体に文句はないんだよな。

死んだじいちゃんも雄牛もかくやの益荒男ますらおだったし、死んだばあちゃんも「葦原小町あしはらこまち」(昭和初期テイスト)と謂いわれた美人うつくしな人だつたらしい。

格子こうしき越しでなきや怖おそくて会話もできないようなムクツケキ男こくつけぎたちが、二代そろつて町一番の美女うつくしを娶めとつた——この逸話いつわのおかげで、葦原神社あしはらじんじゃが「縁結びにご利益アリ」と知れ渡つたんだつてさ。絵馬えいばの売上やお賽錢さいせんのおかげで吉岡家よしおは経済的に困窮こんきゅうしたことがない。俺わとしても両親のバカップルぶりは望むところなんだ。

多少、あてられはすれど。

「おかわり」

「はいはい」

母さんがよそつてくれたご飯に、生卵しゆんをぶつかけて混ぜる。未だ食べ盛りの俺は朝から三杯さんぱい食べる。

普通の電子炊飯器でんしきひangiriなのに、母さんが炊くとなぜにこんなに美味しいのか。魔法か。

今日も一日勉強頑張がんばろうつて、パワーがみなぎつてくるぜ。

俺がささやかな幸せを卵かけご飯と一緒に囁ささやみしめていると、

「プラザ——————！」



謎の奇声が轟いて、危うく茶碗を落としそうになつた。

「ねえねえ、ちょっと来て見て聞いてよ、プラザー！」

「プラザーってなんだよ、楓子？」

二階の自分の部屋からドツタンバツタン階段を駆け下り、台所に飛び込んできた騒音の主に、俺は苦い顔をして訊く。

妹・楓子、十四歳。中二。

母さん譲りの美貌だけど、目が大きくてちと童顔。頭の両端で髪をひつくりつてるのが、さらにその印象を強めてる。同年代の女の子らと比べてもメリハリの少ない寸胴体型。でも脚はスラっと長くて、腰の位置はびっくりするほど高い。見れば、目を奪われずにはいられないだろう。男なら感嘆、女なら羨望のため息とともにだ。その脚線美から「お姫様抱っこしたら映える美少女」町内ランキング三年連続一位を獲得。去年、脚だけ撮るモデルにならないかと誘われ、スカウトマンを殴り倒した経験アリ。

性格は明るい。明るすぎてウザいくらい明るい。

「兄ちゃんって英語で言つたらプラザージャン。英語で呼んだらクールジャン」「…………フウ」

そう、バカじやなければとても可愛いのだ。我が妹ながらもつたないと俺は思う。今でも

モテるが、黙つていれば百人が百人恋に落ちるだろうにさ。

「あら、今日はちゃんと起きられたのね」

さも意外そろうにしつつ、母さんが楓子の分のご飯をよそいだした。

「挨拶はどうした、楓子？」

一方、父さんが咎めるような（一般的には射殺すような）視線を向けた。

十五年一緒に暮らした俺でも思わずチビりそなそれを、

「あ、ごめんごめん、ママママプラザーおはよう」

楓子は自分の頭を小突きながら、テヘっと舌を出して受け流す。全く恥ぢれてない。

「ママはともかく、プラザーはないだろ」

変なラップでも歌いだしそうだ。

この妹は突然的に頭に蛆がわいては、「兄ちゃんてダサくね？」兄者つて呼ぶ方がかつこよ

くね？」とか言いだすのだ。主にラノベの影響を受けて。

「そんなことどうでもいいのよ、見て見てこれ見て」

飯の最中の俺の周りを、まとわりつくようくウロウロする楓子。マジウザい。

さらに楓子は辞書か聖書もかくやという分厚い大学ノート（こんなの売つてるのか？）を鼻^{はな}に突きつけてくる。

俺の両手は箸と茶碗で塞がつてるのが見ればわかるはずなのだが、そんなのおかまいなし。

「メシの後じゃダメなのかよ？」

「ダメー！ 今見てくなきゃやだー！」

「全くしようがねえ奴だな、おまえは」

楓子が一度ワガママを言いだしたら絶対に引っ込めないのは重々承知なので、俺は諦めて箸と茶碗を置いた。

「読んしてくれるの!?」

「これ以上メシの邪魔されたかなわないからな。仕方ねえだろうが」

俺は肩を竦めるしかない。やれやれだぜ。

「うふ。兄ちゃん、大好き」

もうブラザーは飽きたらしい。呼称が元に戻った。

「はい、これ。お礼のチュー」

「い・ら・ね・え・よ」

唇をタコみたいにさせた楓子の頭を、俺は上下に挟んでカクテルみたいにシェイクする。

なんだそりや？ 母さんの真似か？ おまえ、さつきにかつたよな？ 血？ 遺伝なの？

「うにゃあああ」

目を回した楓子から、俺はノートをぶんぐる。ああもう面倒くせえ。

「食事中にものを読むのはやめろ。作ってくれた優子さんに失礼だ。謝れ」

すると父さんに叱られた。額にゴツい青筋を浮かべていた。

「そ、そうだね。ごめん、母さん。ほら、楓子。また後でな」

俺は即従つた。

謝れと言われてるうちはまだセーフだ。すぐさま改めれば許してくれるというサインだ。ここで「俺が悪いのかよ？ 悪いのは楓子だろ？」とか反論しようものなら鉄拳が飛んでくる。

「はい、楓子も」

「ういー。いただきまーす」

母さんに茶碗を渡され、復活した楓子がガフガフ食べだす。早くご飯を終わらせたいらしい。

「おまえは……もっと味わって食べないか。せつかく優子さんがだな——」

それを見て父さんは嗜めようとするが、

「あら、いいじゃない、味なんて。元気に食べてくれば私はそれでいいの」

「ううむ、しかし……」

「私が味わって食べて欲しいのは、あ・な・た」

「優子さん 子どもたちが見てる！ 見てる！」

また母さんがキスしようと唇を尖らせたので、父さんは慌てて固辞した。

「さあ、今日のニュースでも読むかあ」

白々しい台詞を言いつつ、コソコソ引きこもるように新聞を広げる父さん。自分は食事中に

ものを読んでもいいのか。大人つてずるい。

母さんが楓子にウインクする。楓子もサムアップして見せる。
さすがに長年連れ添つてただけあって、父さんの扱い方が巧い。俺としては楓子の大暴れを
きびしく述べた。残念だよ。

実際、朝っぱらからの騒ぎのせいで、食欲はどこかに行つてしまつていた。

「つたく。しようがねえな。ごちそうさま」

俺は三杯のところをご飯二杯でやめ、ぼやきながらノートを広げる。

「もう今度のは超大作！ 超自信作！ 昨日の夜、神が降りてきたんだから！」

「靈媒師かよ、おまえ」

「フ、わかっているではないか。そう、作家とは物語世界と交信する一人の靈能者なのだ」
いきなり芝居がかつた声と口調で、楓子が立った人差し指を振る。こいつは時々こうやって、
スイッチが入る。公衆の面前でやつたら蔑視されること間違いなしの自爆スイッチが。

「小説も書けないくせに作家とか自称すんな」

「ぶつちやけないでー！」

まあ、俺がツッコむとすぐ涙目になつたが。この辺は可愛いもんだな。

「お母さんにも後で読ませて」

全員の食事の世話が終わり、自分の食事を始めながら母さんが言う。

「母さんがそんな怖いもの知らずだったとは思わなかつたよ」

「それがね、今回はあたしも何か感じるものがあるのよ。ノートを見ただけでわかるわ」

「母さんまで靈能者みたいなことを……あーてか、じゃあ俺が読む必要は——」

「だべー！ びいぢやんぽぢやんどびよんぐ。ばだじのぐどうをびでー！」

「わかつたから、口いっぱいにメシ頬張つて喋んな……」

「うひつ。こつちまで飛び散つてきた。バツチイ！」

掃除するの俺なんだぞ？ ほんと迷惑な奴だな。ティッシュどこだつけ？

「つか、苦労つて何だよ。まさか一晩中書いてたとか言わないよな……」

それほどの情熱をかけて、今度は何を書いてきたのかと俺は嫌々ノートをめくる。

A4サイズ一面にびっしり埋まつた文字の羅列を見て、早や眩暈を覚えた。

「今度のはね、『エレサ』みたいなバトルものなの！」

「……おまえのはいつもバトルものじゃないか？」

「天呼さんみたいな激萌えヒロインたちが戦うの！」

「……もう『エレサ』」パクつた方が早いんじゃないか？」

「二次創作も悪くないけど、あたしはオリジナルにこだわりたいの！」

楓子には空想癖がある。で、何やらお詫めいたものを思いついてはそれを膨らませて、ノートに書き綴るのが趣味なんだ。

その空想を妄想の域まで昇華させる天才なんだが、あいにくと他者に伝える技術がない。ありていに言うと、小説とか漫画とか娛樂作品・物語として形にすることはできないんだ。じゃあ、ノートに何を書いているのかというと、思いついたお話の設定を延々羅列するだけ。例えば、今回のノートの一枚目にはこう書いてあった（頭痛くなるので読み飛ばし推奨）。

ストーリー：地上に逃げてきた五体の美少女墮天使を、主人公の美少女聖天使が追つかけてきた！ 五体の墮天使と聖天使はそれぞれ地上の男（当然美形）を《婚約者》に得て、現代社会に溶け込む。そして、聖天使は《婚約者》と協力し、墮天使たちを一体また一体と倒していくのであつた……！！！！！！

以下、登場キャラ設定。
ちなみにも内はあたし的セールスポイントなので必見なのだよ！

・女神の聖天使マープル——墮天使たちを追つかけてきた、聖なる天使様（♥）。美貌、スタイル、性格とも拍子をつけた主人公。（ぶつちやけあたしゃくわいじょくせんぱ、どれだけパワーフェクトかわからーものよのう、フォフォオオ）



・殺戮の天使マリ・シエル——一番弱い墮天使。マープルと最初に戦つて敗れる。冷血無比で、見たもの全てを殺さねば気がすまない。クールビューティー。大量虐殺能力特化。（無愛想なクーデレしが微笑むときに萌えない奴は非国民と断定していくと思う人は拳手ー）



・わだつみの海妃アイシヤリア＝ロナ＝怜美——一番田に弱い墮天使。でも、水中戦最強。チャイナドレスの似合つあ姉さまキヤフ。（しかも、きよぬー。あっぷーー！ あっぷーー！ わっぷーー！ わっぷーー！ あっぷーー！ あっぷーー！）



・リトル・ヴァンパイア☆キケロクロード＝ナイトメア——真ん中の墮天使。
血を吸った人間の心を意のままに操る驚異の能力でマープルを苦しめる。（ロツボジシカウ）できぬのか？（わよぶマジックアスクヤフ。こじりがチコバトルでテコ入れとかないと

お客様さん迷げるしね！マークティングも意識でものあたしマジ神ー！）

・紅薔薇の剣姫ロザリンド＝ジ・ヴァルハラン＝炎煌――真紅の鎧をまとう最強の墮天使。特に一対一の戦闘では無類の強さを持つ。堕天使なのに高潔な性格で、メープルと最後の死闘（素晴らしい一騎討ち）を演じる感動のフィナーレ。（もう想像しただけで涙なしに語れないと思うよね？ね？ね？）

以上が、設定の触りだった。



「…………」

「なになに、兄ちゃん。感想聞かせて？　あ、わかった！　感動で声も出ない？」

「ああ、ある意味感動したよ。血がつながってるのに、どうしておまえだけこんなにアホなんだろうつて」

「なにそれひどい。あたしのどこがアホだってのよ!?」

「とりあえずこの（ ）内には一切ツッコまないからな…きりがないからよ」

「セールスポイントなのに!?」

「わだつみ」と『海妃』で意味被つってるってわかってる？」

「えつ……」

「小難しいあだ名ばつかなのに、何で急に『リトル・ヴァンパイア☆』？　英語？　英語がクールなの？　しかも、この『☆』の意味は？」

「うつ……」

「『ロザリンド＝ジ・ヴァルハラン＝炎煌』とかもうどこからツッコんでいいのかわからない。ドイツ系なの？　英語系なの？　何で漢字なの？　『ジ』って何、『ジ』って？　定冠詞なの？子音の前なのに『ザ』じゃないの？」

「ぐつ……」

「あと、この女神なのか天使なのかはつきりしない奴――主人公？　だけ名前が普通なのもスゲー違和感ある」

だからって、現実アリエネー名前も失笑ものだけど。

「そ、それはあたしを投影した主人公だから。楓つて英語で言つたらメープルじゃん」

「そんなら普通に『カエデコ』とかじゃダメなのかよ？」

「あたし、自分の名前好きじゃないもん。友達にもメープルって呼んでもらつてるもん」

「贊沢な……」

楓子のどこが悪いんだよ。お洒落じゃないか。ぶっちゃけ、羨ましいよ。

少なくとも、「英國旅行で感激したついでに勵んだ結果できた『番目の子』」という、あんま

りな理由で「英二」と名付けられた俺よりもどうマシだ。

仮に中国旅行だつたら、「中二」と名付けられていたのか？
ヤベエ。考えるだに空虚ろしい。

「兄ちゃんもカタカナで『エイジ』とか、英語で『age』って書けばかっこいいと思うよ？」

「イタイタしいわボケ」

「エイジ——その名を貴様の胸に刻め」

芝居がかつた仕種でビシイつと人差し指を突きつける楓子。

「黙れ、デコ助」

俺は自分に酔ってるバカの前髪をかき上げ、ドズつとデコピングした。

「あ、またそのあだ名で呼んだー！」

楓子が両手でオデコを押さえながら、涙目になつて抗議する。

「かえでこ」だから「デコ助」なんだが、最近母さんに似て額が広くなつてきていて、いるのを気に

しているこいつ（前髪で必死に隠している）は過敏に反応するようになつた。

「兄ちゃんなんか年齢カノジョいない歴の癖に！」

「ちよつ、今はそんなこと関係ないだろ!? なに人の急所的確にえぐつてんだよ！」

「近くにいるかわいい女の子の存在に気づかないからそうなるんだよ！」

「いや、わけわかんねえよ」

「何だ？ まだ小芝居入つてんのか？ 正氣に戻るまで、もう一発デコピングが必要か？
とにかく全部読んでよ！」

「ハア!?」

「この数百ページはあらうノートに垂れ流された、言葉の形をした生ゴミを全部!! 何だ？
新手の兄貴いびりか？」

「悪い。俺、涼しいうちに勉強しどきたいんで、また今度な」

俺は憮然とし、ノートを放り投げようとしたが、

「読んでよー」

楓子がしつこいで、投げる代わりに聖書みたいなゴツい角を使ってその頭をはたいた。
かど

「兄ちゃん、いたひ……」

「峰打ちだ」

楓子の涙交じりの文句を一刀両断する。

「ふえええええん、兄ちゃんがぶつたー」

「ああもううるせえ、わーつたよ、読んでやるから泣き真似すんな！」

「エヘヘ」

クソウ演技とわかつても結局ワガママを聞いてしまう自分の弱さが憎い。
俺はとてもみじめな気分でノートを開く。やれやれだぜ。

設定の触りがあつた一ページ目は読んだので、二ページ目をめくると――

女神の聖天使 メープル



本編の主人公。顔よし、スタイルよし、性格よしの三拍子。ぶつちやけ、ぶつちやけ最強。特に究極絶技【超究霸王滅閃】はビルすら一撃で消滅させる威力を持つ。スピードスターとして天界では名を馳せ、誰よりも早く空を翔けることができる。その最高時速はぶつちやけマツハすら越える。また、人払いの結界など様々便利な結界を張る能力もある。とにかく主人公に相応しい強さを持つが、情に弱く、涙に弱いという弱点も持つ(これもまた主人公ぽいよね☆)。地上では普通の男の子を『婚約者』に選ぶ。ちょっと素直じゃなくて、でもいそとなつたり頼れる、包容力のあるお兄ちゃんキヤラフと一目で恋に落ちる(でもメープルはとても健気だ)――

途中で目が文章を読むのを拒否した。

「ザケンナ！ このメープルとかいうクソ天使だけで數十ページも設定あるじゃねえか！」

「読み応えあるでしょ？」

「拷問だ！ おい待て……うわ、マジか……。この調子であと五体もいんのか……」

「ふふん、あたしのやることに手抜かりはないのだ」

「確かに超大作だな。なんかもう妄想つてより、妄執じみてるよ」

「でしょでしょすごいでしょー！」

「褒めてねえよ。皮肉だよ。

俺は頭痛と嘔吐感に悩まされた。ノートのせいで文字酔いした。

せめて読み物仕立てにしてくれていたら、ここまでひどい症状は出なかつただろう。

「ワリ。ちょっと休憩させて」

「あ、じゃあじゃあ、あたしが朗読してあげようか？」

茶碗をペロっと空にした楓子がケロ口と言う。

「……おまえさ、羞恥心とかないわけ？ こういうの中二病とか言うんだろ？」

「邪氣眼中二病ね」

「馬鹿にされてるんだろ？」

「リアル中二だから恥ずかしくないもん」

37 第一幕 新しい朝が来た。希望の朝だ。

そういう問題なのか?

「とにかくよー。よく知らないけど、普通こういうのって自分一人で悦に浸るもので、他人には知られたくない黒歴史的なもんじやないの？」

いや、趣味そのものは個人の自由さ。俺だつ

つてら

ただね。こいつの親友の舞子ちゃんなんか、家族が掃除しに部屋に入っただけで「趣味を見

「んー、兄ちゃんにはあたしの全てを知つて欲しいってゆーかー」

「ひ哉やー！」

体をクネクネ

体をくねくねよじらせる様子を 僕はもう一度ハートの角で凹こた
どこの世界に亘(さかん)るか。どういうのは功
きょうつだらうが、兄妹がいるか。

こいつの頭は大丈夫なのか？ お兄ちゃんは将来が不安でならん。

「あんがんせりんと兄妹仲いいれれ」

「冗談じゃよ、こ。俺は明日からミシベイの部屋暮らして、困つてらう。どうぞ、可いところが母さんにそんなことを言われ、俺は頭痛を起こす。心外にもほどがあつた。

四庫全書

外見とは裏腹に一家で最も常識人、聖職者である父親に助けを求める。

うね
・
・
・

すると、父さんの額にはいくつもの青筋が浮かんでいた。とっくに新聞は畳んでいた。
今までノートに目をやっていたため、気づかなかつたのだ。

「と、どうしたの父さん？」

「一部始終、聞かせてもらつたが――

今度こそ怒り心頭キテるらしい。いつたい何が逆鱗に触れたのか。……まさか俺が怒らし
うやつにしじまないぞううな、二、二三事。助けへ、申義。

「珍しく早起きしたかと感心していれば、徹夜していただけか、楓子……」

俺じやなかつた。よかつたあ

どうも楓子の生活態度について怒つてゐらしい。俺は胸を撫で下ろす。

スイズルに生きようよ!』

「ビキビキ」

その物言いに、父さんの額の青筋が数え切れないほどに増える

ドスの利いた声でさうまれ、俺は動物的本能のままに強者に従う。テーブル越しにノートを手渡した。

「なるほど、力作だ……」

ノートをパラパラめくりながら、父さんが地鳴りのように唸る。

あれだけの分量の文字を書こうと思ったら、まさしく夜通しからいの時間は必要だらうな。

むしろ、普通はそれでも足りないか？ 速度だけならプロ作家並なんじやねえの？

「趣味があるのはいいことだ。打ち込めるものがあることは青春に張りをもたらすだらう……」

やお父さんが立ち上がり、

「だが、自堕落の元となるのなら、こんなもの捨ててしまえ！」

特大の雷が落ちた。

あまりの大音量に、家中がビリビリ震える。

俺は「ひつ」とたじろぎ、危つく椅子ごとひっくり返りそうになる。

楓子も目を回す。

母さんだけがいつの間にか耳栓をつけて味噌汁をすすっていた。さすが夫婦。備えがいい。

「まったく、けしからん！ けしからん！」

本気で捨てるつもりなのか、父さんはノートを持ったままドスドスと台所を出ていく。

「いやーやべでー」

音響攻撃から一早く立ち直った楓子が泣きながらとりすがるが、いかんせん女の子の体じゃな。軽すぎる。羨無双と異名をとる父さんは、歯牙にもかけず廊下を引きずつっていく。

「英二はお兄ちゃんなんだから助けてあげなさいよ」

「なんで俺が!? 母さんが奢めればいいだろ？」 得意だろ？

「京平さんもあそこまで怒ると、振り上げた拳の下ろしどころが必要になるでしょ？」

俺が体を張つて父さんを止める→父さん、俺を殴る→怒りが少し収まる→その隙に説得する……という図式か。

「あんた鬼だ！」

「耳栓つけてるから聞こえませーん」

じゃあなんで会話成立してんんだよ、惚けやがつて！

「ああもう、いつも貧乏クジ引かされるのは俺なんだ……」

嘆きながら、俺も席を立つ。

生活態度を改めないと楓子こそ拳骨の一発ももら�べきだと思うが、さりとてあれだけ頑張つて書いたものを捨てられるというのは忍びない。不本意極まりないが、そう、これでも兄だ。仲裁してやる義務はあるだろう。義務だから仕方ない。やれやれだぜ。ため息とともに俺は肩を竦め、二人の後を追つた。

第一幕 彼の運命は変わった。殺戮の天使のおっぱいを揉んだことで。

殴られるふんぎりというのは、そうそうつくもんじやないよな？

「父さん、勘弁してやつてくれよ」

【謙るから！】 反省するからノートはやへでー！

「楓」はまだ父さんにはしゃべりたいが、弘美

俺も一緒に嘆願してやる。元はと言えば、父さんに手渡してしまった責任もあるしなあ。

「…………」これで説得できれば……なーんてそんな甘い話あるわけないか…………。

アシツ

父さんは鼻を鳴らしてからで珍を貰してくれて、境内に出て——その行き先を俺は語る。

「やばつ」

これはもう体を張るしかない。クソツ、覚悟決めるか……。ああ、こええー

「んなものは、うしてくれる！」

案の定、父さんは焼き場の前に立って、ノートを高々と掲げた

「させるかよ！」
投げ捨てるつもりだろう。未だ絵馬の残骸が燃やされている、淨めの炎の中に。

俺は腹を括り、

を上げて勇気を奮い立たせ、父さんの腰の辺り目がけてタックルをしかける。

「だが、楓子。ワシも鬼ではない——」

しねええええええええええええええ

「今日からせやんと早寝早起きをする」と

「タマとつたらああああああああああああ」

父さんが何か言つてた気がするが、不退転の決意でタックル中の俺には聞こえやしねえ。

「へええええええええええええええええ」
「デス！」

ああ、決まつたね。会心のタツクルつて奴が。^{やつ}

地面に根を張ったような父さんの両足を、ぐらつかせてやつたよ。

「ば、馬鹿もんがああああああああ」
「へへとうたい？」俺たってやる時はやるだろう？
「ほかセヨ」と見直してくれたかい？

俺のタツクルを受け、父さんは田

あ、あれ……？

そのままノリトは綺麗な放物線を描き、静めの炎の中に……

「ぎにやああああああああああああ」

林を切り開いて作つた境内に、楓子の絶叫が木靈する。

それはまさに幽木魔
楓子の体が溶けた油絵のように歪んで見える——そんな錯覚が起きたくらい悲愴な声だった。

かわいそう
可哀想だが……そう、
覆水盆に返らズつて奴だ。だよな？

「おおお……」

父さんは突然として、彦で治ぬの劣をいつまで見ていて、きつと自分がやつてしまつたことに、罪の意識を感じてゐるのだろう。でも、わかるよ、父

さん。それでも楓子を厳しく躾けたかつたんだろう？ 自分の胸を痛めてでも、悪いことをしたらどうなるか教えたかっただんだろう？

環であり、俺は関係ない。ないつたらない。
そうだ、兄として妹に何か慰めの言葉をかけてやろう。それがいい、それがいい。

う……でも、いざとなつたら気の利いたことが思い浮かばないな。
「ぬう…………」

俺は棒立ちになつたままの楓子の肩に置こうと、伸ばした手を宙にさよわせる。

氣を取り直してまた書けよ。今度こそ読んでやるからさ。あ、いや、読むのは嫌だな。どう

……すげー投げやりっぽくて慰めになつてねえ。参つたな……。
そんな風に俺が益体もない思考を頭の中でぐるぐるさせさせていた、その時だ——

怪音とともに、突風が吹いた。

きょうがく

驚愕で、俺はとりとめのない思考から現実へと意識を引き戻された。

「何だよ、これ!?」
絵馬とノートを焼く淨めの炎が、火柱が立つほどの勢いとなつて燃え盛っていた。

それはさつき、俺が散々ダメ出した、楓子のノートに書かれた名前だった。

「どういうことだよ……」

メチヤクチヤ混乱する
めんよう

—おのれ 面奴な……

そんな何と対照的に父さんはいかないとロサリンを見捲るが御
誤一!! ワシが戻るまで、楓子を守りつつアレを見張つていろ!!

一方的に言いつけて、大急ぎで家の方へ戻っていく。

「いや、できるなって……どうしろってのよ?」

相手人間じやないし。空飛んでるし。
となり

俺が弱りきつて いる間にも、楓子は隣で 大はしやぎして いる。

キヤーー！ 口ザリンド様のバツクに薔薇が見えるうううう

見えねえよ。シンナリでもやつてんのかよテメエ】
竈のソツコミを無視、風子はまるで芸能人を前にしてア

机に立って去前ノを前にしが「ソシの」といは
しきいに手を振り

「む……

ロザリンドはそんな楓子を空から凝視した

「我が名は
『紅薔薇の剣姫』
ロザリンド・ジ・ヴァルハラン! 炎煌!
死すべき運命を超えて」

た天魔なり！見ているか、神よ！その撰理を以てしても、このボクの魂たまを戒めることなどできはしないのだと、いうこの奇跡を！

ますますキザつたらしい口調で自己紹介を始めた……。

俺の気のせいかもしれないんだけど——なんかこいつ

いちいち芝居がかつてるつーかさ。もちろん自分に酔つてるんだけど、それを見られるの

もつと快感みたいな……。

いや、無論これはただの推測だ。こんな謎の生命体（？）が何を考えてるかなんてさうはり自分で信ない。でも、意外と人間臭いような――

と、少しでも現状を把握できないかと観察していると、さらに次の異変が起こつた。

アハツ、アツハハハハツ、アーツハハハハハハハツまち

炎の中から、正気を疑うほどけたたましい笑い声が撒き散らされた。「アーッハツハツ。これで死神どもともおさらばだわ、ザマーミロ！」

黒いマントで全身を包んだ銀髪の幼子^{おさなこ}が現れた。

やはりその背にも黒い翼があり、天に駆け上がる。



「でしようがといわれても……」

それも楓子の作り話に出てきた登場人物の名前だよな？ そんくらいしかわかんねえよ。
「もう自由よ！ キキは自由だわ！ この力を使って好きなことをしてやる！ 大暴れしてや
るんだわ！ アーーーハッハッハ！」

「キキたんハアハア……」

まだ狂笑している幼女を見上げながら、楓子がうつとりする。かなりシユールな絵だぜ……。
かと思えば——

「き、貴様！ まだボクの自己紹介が終わってないだろ？ が！ 終わるまでそこで大人しく
聞いていたまえ！」

「なによ、剣姫。どうしてキキがあんたなんかにつき合わないといけないわけ？ 三文役者こ
そ引つ込んでなさいよ。あんたはキキつていう太陽の前じや、月にすらなれないってーの」

「はつ、吸血鬼のくせに太陽とは聞いて呆れるね！ キヤラブレだよ、失望だよ」

「ぐつ……このアマあ……」

上空でロザリンドとキキが口ゲンカ始めたし……。

「ああ、お二人が争つたら、あたしはどうちにお味方すればいいの？？」

楓子は楓子で小指囁んでるし……。

もう收拾がつかねえよ——って收拾どころの話ぢやないな。そもそもこれは何だ？ いつた

い何が起こつてるんだ？ 乏しい状況証拠から推理すれば、だ。

「おい……まさか、楓子のアホ妄想が現実になつてんのか…………？」

いや、待つてくれ。聞いてくれ。俺だつてわかつてんだよ。

自分で言つて信じられないんだよ。

でもさ、その俺の常識を嘲笑つように、三体目の堕天使まで現れやがつたんだよ……。
「あらあら、これは本当にまあ。こんなことあつていいのかしら」

三体目は、目も覚めるような青色のチャイナドレスを纏つた美女だつた。

しかも……そのお……おっぱいが超デカい……。

この期に及んでどこ見てんだつて？ しようがないんだよ！ 事情があるんだよ……

だつてこの三体目のチャイナドレス、胸元に菱形の隙間が開いてるんだ。深い谷間を強調す
るためにデザインだよ。肌が見えちゃうんだよ。あげく、

「ふう、現世の夏はこんなに暑かつたかしらねえ」

とか言いながら、その隙間に指突っ込んで、バタバタ煽いでんだよ。巨大なおっぱいがバイ
ンバイン悩ましげに揉れるんだよ。

俺だつて思春期の男子なんだ！ 一瞬目が釘付けになつてもしそうがねえつて！ 全部見え
ちゃわないかなつて期待してもおかしくねえつて！

「あら——」

「その俺のいやらしい目線に気づかれてしまった……。

「あらあら、わたくしつたらはしたない。ごめんなさいね？」

青チャイナさんは頬を赤らめながら（それがまたそそる！）、黒い翼を広げて上空に昇つていく。勢いよく飛びだした最前の二人と違い、何だか申し訳なさそうに。

うわあ。うわああああ。

もうね、変な目で見て申し訳ないのはこっちだよ！ 気まずいつたらねえよ！

見ず知らずのお姉さん、ごめんなさい！ 謝ります！

「アイシャリア姉さまの上乳眼福うえちちがんふくだあウエへへへへへ」

テメエは俺以上に恥ずかしいな、楓子。

〔涎拭けよ〕

楓子が陶然とうぜんとして青チャイナさんを見つめたままで、仕方なく俺がハンカチで拭つてやる。自分の涎を拭いた後で。

「うふふ、これで念願の同人誌作りができるわ。でもまあ大変、どうしましょう。わたくし、やり方がよくわからないわ。お一人はどうですか？」

青チャイナさんが上空の二人のところへ行き、声をかける。

「遺憾ながら力にはなれないな、レディ。ボクは読む方専門だ。作る方は詳くわらかではない

「そんなもん、専門家を捕まえて協力させればいいのよ。キキならそうするわ」



すると、さつきまで一触即発ムードだったロザリンドとキキなのに、青チャイナさんを交えてまるで井戸端会議みたいなノリで話し合ひだす。

「読む方専門ですか。いいですねえ。わたくしも先に思いつき堪能たんのうしようかしら？」

「そうとも！ もう誰かの後ろから覗かなくても、存分に漫画を読めるんだよ！」

「ふーん、海妃かいひの好きにすればいいけど、夏コミに参加するつもりならスケジュール的に切羽詰せつぱまつてんじゃない？」

「あらあ、そうですねえ。弱りましたねえ」

青チャイナさんが現れた途端、急に空気がほのぼのとしてしまった。調子狂わされたぜ。

それに、だ。……同人誌？ ……漫画？ ……夏コミ？

およそ堕天使という超常の存在が口にするには、相応しくない単語だろ？ 誰だつて戸惑わずにはいられねえよ。

だから、俺は楓子に問いただした。

「なあ、あの同人誌がどうとか言つてる青チャイナさん——アイシャリア？ ノートにあった『わだつみの海妃』のことなんだよな？」

「うん、兄ちゃん。あれくらいスリットの深いチャイナドレスだとね、普通のパンツじゃ見えちやうの。だから際きわどいくらいのヒモパンじやなきやダメなんだよ」

「そんな質問してねえよ」

俺はツツコミ代わりに足蹴あしげにしたが、
「ウエへ。ウエへへへ。痛くない。痛くないよ」
楓子は陶然としたまま下から——つまりイケないアンダルでチャイナドレスの中身を覗いていた。

おまわりさん……早くこいつタイホしてください……。

ちい、肝心のこいつがこのザマじやあ、聞けるものも聞けねえぜ。

いつたいあの連中は何なのかとますます謎が深まり、俺が目を白黒させていると——

とうとう四体目まで現れてしまった。

クソッ、際限ねえぜ、こりやあ……。

【…………】

騒々しい先の三体と打って変わり、四体目は重苦しいほど無口だった。

それはいいのだが、炎の中から飛びだすなり一直線にこっちへやってきて、俺は肝を潰つぶしそうになる。

「な、なんだよ……？」

これまた美貌むぎょうの堕天使だった。整いすぎて、かえって個性がなく印象が残らないという不思議な美しさ。

【…………】

恐らくは、万色にして無貌むぎょうの天使ナーシエだろうか。

【…………】

そのナーシエが物言いたげな目で見つめてくる。

【…………】

唐突に胸に痛みを覚え、俺は手で押さえた。何かの攻撃を受けたのかと思ったが、違った。急に、すっげー悲しくなったんだ……。

「ど、どうしたんだよ？ なんでそんな顔するんだよ？」

ナーシエの表情がとつもなく悲しげだったから、俺にまでその気持ちが移つてきちゃった

感じだ。ああ、なんかもらい泣きしそう。せつなくなるほど、胸が痛いたえよ。

【…………】

不意にナーシエが俺に触れようと、そつと手を伸ばしてきた。

「ひっ」

俺は反射的に避けてしまつた。相手が何を考えているかわからんのだ。当然だろう？

【…………】

でも、ナーシエの表情がますます深い悲しみを帯びてゐる……。
俺はえもいわれぬ罪悪感ざいよくかんに囚われちまつた。

【…………】



ナーシエは悲しげに顔を伏せたかと思うと、最後まで無言で天へ飛び去った。次から次へ——もう何が何だか分からねえ。

ともかくこれで四体、楓子のノートに書かれた妄想の産物が具現化された。しかし、なんでいきなり墮天使たちが具現化されてしまつたんだよ？

俺はいったいどうすりやいいんだよ？

周回するよう天を舞う彼女らを見上げながら、俺はひたすら無力感を味わう。そこへ——

「待たせたな、英二！ 楓子！」

「家で戦う準備をしてきたのだろう、父さんが戻つてきててくれた。」

「悪霊退散！」

淨めの塩（ぶつち やけ台所にある伯方の塩）を撒く父さん。

さすがは神職。さすがは豪胆で知られる男。顔が怖いのは伊達じやねえ。この怪異を前に一

歩も怯まない。頼もしいぜ。俺は改めて父の偉大さを知る。

「祓い給え！」

「さて、諸君。無事転生を果たした我らの、とするべき道を協議しようではないか！」

「淨め給え！」

「フン、仕切らないでよ、剣姫。キキは好きにやるわ」

「祓い給え！」

「そうですねえ。元々は縁もゆかりもないのですし、各自別行動をとりませんか？」

「淨め給え！」

【.....（無言で首肯）】

「悪霊退散つ、ハア――！」

「よかろう、諸君。ならば卿らの武運長久を祈る」

……氣のせいいか、全然効いてなかつた。

父さんが顔を真っ赤にして塩を撒いても、墮天使たちは痛痒も感じてなかつた。要するにまるで相手にされてない。

「このダメ親父！ 不信心者！」

「なにおう！」

思わず俺は口でツッコミ、お返しに父さんの拳（こぶし）でツッコまれる。

クソッ……死ぬほど痛つてえ！ よくもやりやがつたな！

「普段偉そうにしといて、いざとなつたらまるでダメじゃねえか！ 感動して損したわ！」

「この罰当たりが！ いいから黙つて見ていろ！」

「罰当てるなら、あいつらに当ててみろつづーの！」

「よーし、いいだろ。その減らず口を後悔させてやるからな！」

いつもの父さんなら、俺の剣幕など子犬に吠えかけられたが如くあしらう。でも、父親の威失墜の危機と自覚あるのか必死だった。

げていき、空の彼方へと消える。

悲劇のヒロインのように楓子が王

「そら見たことか！ ワシの淨めの力が勝つたわ」

「嘘ではない！」

「羊田リ」

「やめて、殺し屋みたいな目で睨まないで、ごめん父さん！」

竜とメンチの切り合いで勝てる人類なんかいるの？ 僕は速攻土下座して謝る。

父の権威復活でか、俺かとうかしてた、見境なくしてた、この人に向かって暴言吐くとか自殺志願者かつてーの。俺の人生設計では八十まで生きるんだよ。孫に聞まれて死ぬんだよ。

「やっぱ効いてなかつ……いえ何でもないです。ないです。

再び睨まれ、俺は地面を覆う玉砂利に額をこすりつける。

——ふうふ、皆いなくなつたあ……

「いや、そりは喜ぶところだろ」

「はつはつは、ワシの淨めの力に感謝せい」

ハノのハカホあきら

俺は先に立ち上がり、楓子を宥めて手を差し伸べる。

「帰つて、母さんの茶でも飲も――

それは黒板を引つ搔く音か、はたまた悪魔の産声か。

「なんだよ！ 今度はなんだよ!? いきなり耳障りな音が響き渡り、俺たちは耳を覆った。まだ終わってなかつたのかよ!」



もう泣きたい。いや、妹が見てなかつたら、多分泣いてたよ。
耳障りな音に合わせ、まだ収まつていなかつた火柱が悶えるように歪み、渦巻き、螺旋と
なつて天を衝く。

火柱の上——まるでそれが固体であるかのように立つ、少女の姿がそこにあつた。

「また堕天使か……？」

悪魔の産声とともに現れた少女——俺の肌が粟立つ。

「……いや、違う？」

新たに現れた少女の背中には、純白の翼が見えた。
そう、漆黒ではなく純白だ。つまりは、聖天使の証つことだよな?
身にまとう鎧の色も白。ただし、重厚なものではなく、まるで水着のように表面積が少ない。
ゲームに出てくる女戦士が着ていそうな鎧。白い肌とコントラストがついてなくて、かえって
艶めかしい。まして体のラインにはメリハリがついているから一層。

でも、俺の視線をとらえてやまなかつたのは、その肢体ではなく顔の方だった。

「……楓子？」

五体目の天使の顔は、どこからどう見ても妹そつくりだったのだ。

それで、はつとなつた。楓子のノートの記述を思いだした。

主人公格である女神の聖天使の項目に、「ぶつちやけ、あたしそつくり」とあつたよな?

「あんたが……女神の聖天使メープル?」

「ええ、そうよ」

聖天使がフワリと地に降り立ち、翼をたたむ。かと思つと、こちらへ歩み寄つてくる。

「助かった……」

どういう現象かは知らないが、ともかく妹のノートに書かれたイタい設定が現実となつた。
ならこの聖天使は正義の味方で、あの逃げた堕天使たちを追つてきてくれたのだろう。
後はこの妹そつくりの天使に住せておけば、万事OKというわけだ。

そのはずなんだよ……。

なのになぜ、俺の鳥肌は消えないのか。背筋がゾクゾクするのか。

友好の証であろうはずの聖天使の笑顔が、どうしてこうも恐ろしいものに見えるのか……。
うう、もうやめてくれよう……。ほんとに泣くぞ……。
なんて考えてたら、いきなりキスされた。

「むごーーーーーーーー？」

とんでもなく唐突の事態だったので、反応が遅れる。

「なにやつとんじゃーーーーー!?」

楓子が隣で非難の声をあげる。

「ちよつ、ちよつと何やつてんのよ、あんた!! あたしの兄ちゃんに何してくれてんのよ、あ

んた!? バカなの? 死ぬの? きいいいい、いいから今すぐ離れなさいよ!」

何を取り乱しているのか、髪を振り乱しながらぎやあぎやあ騒いでいる。

しかし、聖天使はそんな罵声はどこ吹く風で、愛の行為に没頭している。

俺は頭が真っ白になつて何も考えられない。

ちゅぱつ、と音を立てて聖天使の唇が離れていつた。

唾液が糸を引いて、お互いをつなぐ。

聖天使がそれごと自分の唇を手の甲で拭う。はしたない仕種が恐ろしく妖艶だった。

「気持ちよかつた?」

訊かれて俺は事態についていけず、感触も余韻も楽しむ暇はなかつた。舌を入れられたのが入れられなかつたのかも思いだせない。

「妹とキスした……妹とファーストキスした……」

どころか、今の俺は精神崩壊を起こしかけていた。

「ククク、今日のところはこれで我慢ね? 続きはまた今度、たっぷりしてあげるわ」

そんな俺におかまいなしに、聖天使は光の剣(ガンダムのビームサーベルみたいな奴)を抜

き放ち、楓子に突きつけた。

「大丈夫よ、麻痺モードにしているから。チクつとするだけで死にはしないわ」

それを見て、怖い台詞を聞いて、俺はようやく正気に戻る。

正常な判断力を取り戻したからこそまた混乱する。なぜ楓子が狙われているのか?

聖天使



は正義の味方ではなかつたのか？ 考えれば考へるほどわけがわからない。

答えが出せずに立せ戻す俺の代わりに
楓子を守つたのは父さんだった

「おのれの娘は手に出でせん！」

「じゃん!!」
一六、ツツロミ入れてハハ?

しかし、聖天使も然る者だつた。

「オジさんの強さを忘れていたわね。生身で受けたらいかに私でも危ながつたわ」

その全身が、目を剥ぎながら、薄うで回まられていく。

「ダイヤモンドダストつてあるじゃん? 氷の結晶が降るんだつけ?」

使の周囲にはそれに似た、光の結晶が降り注いでいるように見えた。

「え、
【天使の羽衣】 キターナー」

「知つてんのか、楓子？」

一あたしかせと力して來
二二、光の結論

二三の事

「え?
じゃあ、あの普通に着てる鎧の意味は?」

「貴い人にはそれがわからんのです」
鎧なんか飾りにすぎんのです。

「偉い人って誰だ?」

「いいから日本語で喋れや！」

俺は左手で楓子の前髪をかき上げ、右手でデコピンした。

「四〇」　　「ひと／＼笑はしてゐる／＼」

きょうざい
一言で切り捨てる。

「ぬおおおおおお

「フン！ フン！ フン！ フン！」

タイソンばかりの右フックを叩き、アーネスト・ホーストもかくやの左ハンド、ハンド、ハンドを打つ。ニンゲンファイド、ビビッド。

だが、【エンジェリックオーラ】に守られた聖天使はまるで無傷だった。バケモンか、こいつ……。



「ぬうう、本当に効かぬようだな」

歎きしりする、父さん。

知らない人が見たら、絶対にこっちが悪役だと思うだろう物騒な表情だぜ……。

「じゃあ、そろそろ私からも遊んでさしあげなくてはね?」

いや、聖天使も負けてなかつた。獲物を前にした蛇のように、且つ妖艶に舌舐めずりする。か

てかそれ洒落になつてないんですけど……。

楓子のノートに書かれた記述、荒唐無稽な技の設定の数々が俺の脳裏をよぎつた。

あれが本当に現実になるのなら、父さんが人類最強レベルと仮定しても瞬殺される。

いや、【天使の羽衣】だつて実際に使つてみせたのだから、当然他の技だつて使えるだろ。

「参るわ、オジさん」

マズイ。父さんがピンチだ……。

どうする!? どうする!? 僕、どうする!? 何ができる!?

うう、泡食うことしかできない、情けない俺。

「お待ちなさい!」

しかし、やはりというか、こういう時に駆けつけるのが——

「お待たせつ、あなた。着替えに手間取つたわ」

「か、母さん!?

内助の功つて奴なんだろうな！ 絶妙のタイミングで、巫女服（意外と着付けが難しい）姿の母さんが来てくれたよ！

「ふふん、優子さんが来れば百人力よ」

「行くわよ、あなた！」

母さんが淨めの塩（台所からとつてきた）をバラ撒く。

「祓い給え！」

するとどうだ、聖天使を覆つていた【天使の羽衣】が煙のように消えていく。

「……によ……これ……!?」

今まで不敵に笑っていた聖天使の笑みが凍りつく。

「ワシの優子さんは靈感バリバリだからな！」

父さんがフンヌウと鬪気のこもつたパンチを放つ。

「くうつ、まずい……」

直撃したらタダじやすまないと見たか、聖天使が素早くかわした。さらにはそのまま父さんの拳の届かない空へと退避する。

「オバさんまでこんな力を持つていただなんて、本当に人間かしらこの夫婦」

毒づく聖天使。俺も正直自信ないツス。

「チ。面倒な奴も来るし、今日のところは見逃してあげる」

楓子、次いで俺と順に流し目を送り、聖天使が翼を広げる。その体がフワリと浮いたかと思ふと、ロケットのような速度で空の彼方に消えた。

「ハッハッハ、見たか、ワシら夫婦の無敵っぷりを！」

勝ち誇る父さん。

「あなた、かつこよかつたわ。ちゅ」

抱きつく母さん。

「ま、待ちなさい！ 神聖な境内で破廉恥はいかん！」

「うふふ、じやあうちに行く？」

「ううう、メープルたんにもフラれたあ……」

楓子は楓子でハンカチ囁んで泣き崩れるし。おまえ、剣突きつけられたの憶えてねえの？

「皆、しつかりしろよ！ さつきの聖天使の台詞聞いてなかつたのかよ!?」

俺は我慢できなくなつて叱咤する。

聖天使は去り際言つただろうが？ 「面倒な奴も来るし」 ってよ！

うう、イヤな予感しかねえ……。

それでも俺は勇気を出して、そおーっと未だ燃え盛る淨めの炎を見やる。

炎が爆発的に膨れ上がり、一層巨大な火柱と化していた。
かと思うと、急激に一点に収束した。
あれだけ轟々と燃えていた炎が、余熱すら残さず消しとんだ。
そして、跡には一人の少女が残った。

可憐な容姿に不似合いな無表情。服は上下黒ずくめ。背中には黒い翼とバカでかい鎌。人ならざる青い髪は癖つ毛なのかあちこちはね、うなじで一房にまとめられて尻尾状に垂れている。右手にあるのは妹のノート。ところどころ焦げてはいるが、なぜか無事だった。
そのノートに書かれた設定によれば、妹が空想した天使の数は六。
今、俺が目にした天使の数は五。

つまり、この黒服の少女が最後の一。
つことはだ――

「見たものを全て殺さねば気がすまない、殺戮の天使……」

俺は独白し、恐怖のままに瞠目した。

隣の楓子と抱き合つて震えた。

「次は貴様がああ」

頼みの綱は両親だ。母さんの清めの塩によるバッカアップを受け、父さんが突撃する。
「うわはははは、くらええええええ！」

両手を組み合わせて、大きく振り上げる父さん。

「オ、オルテガハンマー出たーーー！」

何それ、楓子。強いの？

「ただでさえハンマーのようなパパの拳骨を、二つ重ねる大技よ！ 見て、兄ちゃん！ さら
に威力を上げんと二つの拳をより高く振り上げてるでしょ!? それによって位置エネルギーも
高まり、一気に叩き下ろすことで運動エネルギーに変換させるわけなの！ 力学に基づいた合
理的な体の使い方って奴なの！ 両の拳がこれからどれだけの破壊力を生むのかと思うと、あ
たしは手に汗握らずにいられないよ！」

「なるほど、合理的か。いいな……」

スゲエよ。

いや、父さんもだけど、おまえの知識も。え？ 中二病患者って皆こんなすごいの？
ともかく、どれだけすごいだけは、よくわかった！

父さんはまだまだ足らぬとばかりに、両拳を高く振り上げる。
さらに高く、高く、全身を伸ばして振り上げ——
ゴギン。

あ、なんかイヤな音がした。

「ふおおおお腰がああ腰がああああああああ」

父さんはギックリ腰が持病なのにハッスルするから……。

あーあーあー、あんなに地面をのたうち回っちゃって……。

体を一気に伸ばしたら、腰に突然的な過度の負担を与えてしまってから厳禁って、いつも自分で言つてなかつた？

「あなたああああ

母さんも傍に駆け寄り、腰をさすつて看病を始める。

「なんだかなー……つて呆れてる場合じゃねえだろ、俺！」

助けなし。

〔…………〕

殺戮の天使が自爆した父さんから視線を移し、俺はじろりと睨まれる。

ターゲット決定か……。

「おい、逃げよう」

俺が声をかけるも、楓子は微動だにしない。

「いや、怖いのはわかるけどさ。俺も同じだけどさ」

普段生意気でもそこは年端もいかない女の子のことだ。

足がすくんだって笑やしないよ。でもな？
「おい、しつかりしろ。走るんだ。できるだろ？」大丈夫、父さんと母さんなら自力で何とかする。だって俺たちの親だもの」

このままでは殺されるので、俺は楓子に懸命に発破をかける。

「う……うへへ……えへ、えへへへへへへ」

「おい……どうした……？」

猛烈に嫌な予感が強くなりつつ、恐る恐る楓子の顔を見る。

目がイッてた。

表情が恍惚と蕩けていた。

「もう逃げない。ううん、もう逃がさない。ロザリンド様もキキたんもアイシャリア姉さまもナーシエたんもメープルたんもみんな逃げられたけどマリシエルたんは、マリシエルたんこそはあたしのもの。ああ、天はあたしを見放さなかつた。もう一度チャンスをくれた！なんだろこれ、神様のクリスマスプレゼント？ 今、夏だけど。うち、神社だけど。ううん、そんなのどうだつていい！ あたしのマリシエルたん！ あたしのマリスたん！ ああ、マリスさんが俺の嫁すぎて困るよ！」

俺は思いつき楓子に頭突きした。

「おまえの頭に巣くう蛆の方が困るわ！」



「握手してー！ ハグしてー！ あたしにもキスしてー！」

全然堪えてなかつた。

どころか、このバカ妹は殺戮の天使に向かつて駆け寄ろうとするので、俺は必死で羽交い締めにした。

「いや、そんな場合じゃないから！ ほら逃げるぞ！」

「あたし、もう死んでもいい！」

「アホか、死んでたまるか！」

「兄ちゃん、私と一緒に死んでー！」

「嫌だあああ。少なくとも妹とは嫌だあああ」

兄妹漫才をやつっているうちに、殺戮の天使マリシエルは俺のすぐ傍までやつてきていた。背中にある身長より長い大鎌の柄を、ずりずり引きずりながら。

「命だけはお助けを！」

無駄でも何でも命乞いする俺。笑うなら、笑え。でも俺は断言するね。今の俺と同じ立場になつたら、誰だつてそうするね。でも、心はもう半分諦めていた。

ああ、俺の人生つて短かつたなあ。どうせ死ぬなら勉強なんかせずにカノジョ作ればよかつたなあ。妹ウザかつたなあ——そんな想いで大半が占められていた。

足がすくんだって笑やしないよ。でもな？

「.....」

殺戮の天使が感情の見えない、透明な瞳ひとみを向けてくる。

いよいよ年貢ねんぐの納め時か。父さん母さん、ごめん。せめて楽しい走馬灯そうまとう見たかったな。

「でも、おまえだけは逃げろ」

俺は観念し、死力を振り絞ふしづって楓子を両親の方に突き飛ばす。

さらには殺戮の天使を抑え込むため、跳びかかつた。

「兄ちゃん、そんなのだめえ！」

楓子が悲痛な声で哀願する。

この妹はなんだかんだで兄を案じてくれる。だからこそ、俺は聞かない。

仕方ない。他に術すべがない。やれやれだぜ。

「かかつてこい！俺が相手だ！」

この身を賭してせて時間稼ぎをせんと少女にタックルし、押し倒す。

さつきはあの父さんにだつて向かつていけたんだ。殺戮の天使なんざどうつてことないね！

「あ.....」

すると、殺戮の天使が声ともいえないような吐息といき（しかも妙に色っぽい）を漏らした。

だが、俺はそんなものに気をとられる余裕はない。

小柄こがらで軽いからか、その体格に不釣り合いな大鎌を背負つてゐるせいでバランス悪いからか、

押し倒すまでは簡単だった。しかし、殺戮の天使も抵抗てきて、二人で揉み合ももあい、体がもつれ合い、俺もとりおさえるために玉砂利の上だという痛みさえ忘れて暴れる。

無我夢中だつたから、何をどうやつたかはわからない。ともかく俺はマウントポジションをとつた。少女に馬乗りになつて、両足で細い腰をガツチリ抑え込んでやつた。

「う.....」

そして、俺は当惑する。

初めて、殺戮の天使の顔を間近から見ると予想以上に――
「か、可愛い.....」

と気づいたのだ。胸がドッキンコ、ドッキンコと高鳴るほどに。

人形のように整つた、無表情の美貌。しかし、人形ではないことが傍で觀察するとわかる。震える長い睫毛まつげ。白い肌の下に透ける赤い血。蓄つばみのような唇からは甘い吐息が漏れる。

「ゴクリ」

と、喉を鳴らしてから、俺はぶんぶん頭を振つて目を覚ました。

こいつは敵だぞ、つて自分に言い聞かせた。

「お、おまえもなんとか言えよ.....」

強がり、殺戮の天使を見みつける。

殺戮の天使もじつと俺の方を見つめたまま。

これも近くで見るとよくわかる。その瞳は本当に透明で、無垢にすら思えて、俺はくじけそうになつた。なんだか自分が敵意を剥き出しにして、ひとり相撲をしているかのようだ。

「言えってば……」
内心の動揺を隠すため、さらに虚勢を張る。
すつ、と少女の口が開いた。

「……手をどけて」
「え？」

指摘されて自覺する。一心不乱に少女をとりおさえ、それからすぐに彼女の美貌に見惚れ、ずっと自分の手が今どうしているのか意識の外にあつたんだよ。

左手でわしづかみにしていた。

少女の小ぶりな胸を。

「ごめんなさいいいいいいい」

慌てて左手を引こうとするが、できない。

少女はどこでと言つたくせに、逆に抱え込むように両手を重ねてくる。
官能的なまでにぶにぶに柔らかい感触が、強く掌に押し付けられる。

「うあ……あ……」

結婚前にこんなことしちゃいけないので。むしろ俺たち恋人ですらないのに。でも気持ちいい

い。つてダメだろ離さなきや！ でも、ずっとこうしていていいというのも本音で……。しかも、あつちが放してくれないという言い訳まで用意されていて……。もういつそ楽しんでしまおうか？ モミモミしてしまうか？ でも、そんな卑怯な真似できねえ！ でも、背徳的な誘惑をにわかに振り切れない。でも……でも……でもおおおおおお——

清い心と煩惱で、胸が二つに裂けてしまいそうなほど俺は苦悩する。

していたら、少女がまた口を開いた。

「……大胆な人」

「スンマセン。わしづかみして、ホントスンマセン」

「……そして、勇気のある人」

「さあ、いつたいどうなんでしようかねえ」

なぜか敬語になつている。それくらいパニクつている。

「……決めた。あなたと『婚約』する」

「痛つ」

軽い電流のようなものが俺の左手の甲を走つた。

「……仮『婚約』完了」

それから、少女がようやく解放してくれる。
「んなつ……」

俺は自由になつた左手の、痛んだ部分をまじまじと見つめた。
いつたいどういう魔法か、小さな黒い痣あざができるていた。

「……逃げた五体を捕まえるため、『婚約者』パートナが欲しい」

何を言つているのか、よく理解できなかつた。

「は?」

「……聞こえなかつた?」

「どうか私に協力して欲しい」

言葉だけでは足りないかと殺戮の天使が、仰向けのまま器用にぺこりと頭を下げる。
つまりそれは要するに――

「殺さないの?」

「……誰が殺すと言つた?」

おずおずと尋ねる俺に、彼女は即答する。

言われてみると……気づいたわけよ。

確かに俺たちはこの子に襲われたわけじゃない。むしろ早合点して襲つた側だ。

「……不合理な理由で殺しはしないわ」

「そ、それはよかつた……んかな……?」

色々なことが一度に起きすぎて、そのたびに驚かされて、疲れて、もう何もかも億劫おつかうだった。
もういつそ寝てしまつた。

つてなことを考えて、寝たら勉強できないじゃないかと思いつつ。

ああクソ。命が助かつた途端とたん、学校のこととか成績のことが頭をチラつきだした。

第三幕
(殺戮の) 天使がうちにやつてきた!

(殺戮の) 天使がうちにやつてきた!

ヒヒヒイ言いながら動けない父さん（体重〇・一トン）を寝室まで運び、俺は居間に戻った。
すると、台所でお茶の準備をしていたのだろう、お盆を持った楓子と廊下で出くわす。

思わず立ちすくんでしまう、俺。

兄ちゃんどうしたの?
「いや、何でもない」
わたしの顔はなんかいいてる?」

とか言いつつ、俺はさりげなく目を逸らす。
やべー、頬^{ほお}が熱いよ。落ちついた気分で改^そる。

ついさつき、瓜二つの顔でキスされたのを。

とキスとか恥死レベルだろ？ 間違いなく悪夢。
ああもう最悪だ。ほんと最悪だよ。何で顔がどんどん熱くなつてんだよ。マジ最悪だよこれ。
最悪だよ、な？

• • • • •

「……ちょっと、もつたいなかつたかも」

もつと感触を楽しんでおナゾよかつた。

一
二
三
四
五
六
七
八
九

アツブネ、世迷言を聞かれてなくてよかつた。

「今日のは大分痛みがひどいらしい。白目剃むいてた

卷之三

母さんに看病頼んできた。で、それ、あいつに出すの？」「うへへ、あたしの淹れたお茶がマリスたんの唇に触れて、マリスたんの口中を蹂躪して、じゅうりん

像しただけでウツトリしちやう

俺は変質者を見る目で妹を白眼視した。

「おまえ、バレンタインのチョコに自分の髪の毛入れるタイプだろ？」

「ギクリ。何でわかったの？」

「去年の義理チヨコ、食べなくて正解だつたわ……」

「ぎ、義理じゃないもん！ それに食べずにどうしたのよ！」

「クラスの湯川君が物欲しそうにしてたんであげた」

「捨てられた方がまだマシだ！」

妹の抗議を聞き流し、俺は襖を開けて居間に入る。

実はちょっとおつかなびっくり……。

十二畳の和室に年季の入つた座卓が置いてあり、そこに殺戮の天使が正座している。

あー、こいつともさつき桃色アクシデントが起きたわけだが、別にゴニヨゴニヨの手触り

を思いだしたり、名残を惜しなりはしなかつた。

なにしろこいつは可愛い少女のナリをしてても、その実恐ろしい力を秘めたモンスターだ。

しかも、何を考えているかわからねえ。いきなり襲つてくるようなことはないみたいだが、爆

發物のように慎重に取り扱う必要がある。そう思うだろ？

「お待たせ」

俺は座卓の対面に腰を下ろす。そうしたらバカ妹が殺戮の天使の隣に行こうとしたから、引っ張つて俺の傍に座らせる。こいつは蜂の巣を好んでつつくタイプだな、まつたく……。

「粗茶でございまーす」

楓子が湯のみを配り、急須から茶を汲んだ。

冷たい麦茶の方がありがたかったな——って、待てよ。

この堕天使、茶なんか飲むのか？

「……ありがとう」

迷わず飲んでた。

「……熱っ」

しかも舌を火傷してた。

「……」

顔は無表情のまま、口を手で押さえて悶えていた。

「…………弱すぎだろ」

俺は呆然としきりに、思わず本音を漏らした。

え？ 仮にも堕天使だろ？ お茶で舌火傷つてどうなの？

あ、そういうやさつき楓子が、肉体的には俺らと変わらないとかどーとか言つてたっけな。

「……何か言つた？」

ジロリ、と堕天使が睨んでくる。

「ハイ？」

それは、いきなりだった。

堕天使のうなじで一房にまとめられた尻尾状の髪が、ニヨロリと伸びた。
それはまるで宙を這う蛇のようになつて、俺の首にニユルリと巻きつく。

「……何これ？」

「で、出たーーー！」 マリスたんの【鋼糸塵陣】だーー！」

「し、知つてんのか、楓子？」

「そりや、あたしが作つた設定だもん

……そりやそうだ。

「マリスたんは自分の髪に殺戮の魔力を込めることで、その一本一本を強靭な刃に変え、しかも自在に動かすことができるんだよ！」

「や、やいば……？」

「言われてみると、この髪フツーリやねえ。なんつうの？ 冷たい鋼線みたいな……。

いつでもスパつといかれる……。

「……弱いとか言つた？」

「すみません、言つてません」

俺は迷わず座卓に手をつき、額をこすりつけた。

「……そう」

堕天使の髪の毛がシユルリと元に戻る。ふひー、勘弁してくれた。



「やつぱーええよ、こいつ……」

「さすがは堕天使だぜ。迂闊な発言は避けよう……。俺はもう肝に銘じたぞ！」

「ん？ そういうやあ

堕天使と言えば、今更ながらに気づいたんだけど。黒い翼が消えてるな？

ないし。あれってシンボル的なもんじゃないの？

「……あれらは必要な時だけあればいい。それ以外は邪魔」

へえー、消すことができるんだ？ 折りたたむとかじやなくて。

便利なんだな。ちょっと感心したよ。マジで。

「えーっと、マリシエルだっけ？」

「……マリスでいい

か細い声で、ぼそぼそと喋る殺戮の天使。

「オーケイ、マリスね」

正直、助かる。マリシエルつて微妙に長くて呼びにくいくわ。

「俺は英二、こつちはデコ助」

「デコ助じやないもん！」

「……よろしく、英二。デコ助」

「ちょつ、真に受けてる!?」

愛してやまない存在（自分の妄想まんまだし）にデコ助と呼ばれ、楓子は涙目になる。
ごめん、俺がしかけとてなんだけど、笑えたわ。

「……じゃあ、何と呼べばいい？」

「楓子でいいよ。メープルだつたらもつといいな」

「……？」

マリスが小首を傾げた。楓子の複雑な心情というか機微が理解できないのだろう。まあ、で
きんわなあ。俺もできんし。

「楓子でいいよ、楓子で」

「……わかつた。よろしく、楓子」

だから俺が助け船を出してやり、マリスが了解する。

「ハイハイハイ！自己紹介が終わつたところで、マリスたんに質問があります！」

楓子がズビュっと元気よく拳手する。

「マリスたんはほんとにあたしのマリスたんなんですか!?」

「……？」

質問の意味がわからないのだろう、小首を傾げるマリス。

うん、普通はわかんないよね。多分、楓子は「自分のノートに書いた設定が本当に現実化し
たのか？」と訊きたいんだろう。

「……？」

「とにかく、いつたぜんたい何が起こつてるのか、こつちやさつぱりわかんないんだ。その

辺、教えてくれると嬉しいんだけど？」

通じたところで楓子の質問はどうにもまどろっこしく感じたので、俺は一気に核心を衝く質
問に変えてみた。

「悪い、急に聞きたくなくなつた」

恐ろしい殺戮の天使だが、幸いコミュニケーションはとれるようだ。背中に取扱説明書が
貼つてあるわけでもなし、相互理解を深めて接し方を知ろうと俺は努力に走ったわけだ。

「……私もレクチャーしたいと思つていた」

——で、すぐに後悔した。自分の失態に気づいた。クッソー、藪蛇じやんか、これじゃ！
あんな大事あつたら、つい究明してしまいたくなる人の業がつ。業が悪いんだつ。

こんなバケモノ、適当にあしらつて速攻追い出すべきですよね！ ですよね！
なに自分から首突っ込んでんの、俺？

「……一言でいえば、私は死神」

しかもこの殺戮野郎、俺の嘆願を無視して話し始めやがった。

「……私の役目は死を受け容れられず、成仏できない幽靈を捕まえて、あの世へ送ること」
捕まえて？ 説得してじゃなくて？」

「……無理矢理」

俺は楓子を抱いて、壁際までズサッと逃げた。

「く、く、く、来るなら来い、死神！ おまえなんか怖くないんだからな！」

「……繰り返す。私の仕事は幽霊を成仏させること。生者のあなたたちを殺すことではない」

「あ、そうなの？」

俺は額の汗を拭つて、楓子と一緒に座布団の上に戻った。ビビらせんなよなあ。

「……そして、幽霊となつてさまよう者はとても多い。私たちの仕事は絶えない」

「わかる気がする。死んだからって納得できそくはないよな。俺だったら『もしかしたら生き

返ることができるかも?』とか考えそく」

「……中には何十年、何百年と私たちから逃げ回る幽霊もいる」

「ハハ、往生際の悪さもそこまでいけば特技だな」

「……笑い事じやない」

「すみません」

またもマリスの【鋼糸壁陣】が首に巻きついて、俺は即謝った。

「こええよ。こいつ死ぬほどこええよ。関わるんじやなかつたよお。

「でか、生者は殺さないんじやなかつたのかよ！」

舌の根も乾かないうちに反故しやがつて。

「……これも最初に言つたはず。不合理な理由で殺しはしない、と」「合理的な理由があつたら殺すのかよ！」

俺は震えあがつたね。失言、粗相の類には気をつけようと決めたね。

「ほへー。死神つて実在したんだ。かつこいいー」

隣で楓子がガキみたいに（まあこいつはガキだが）瞳を輝かす。

「でもさ、あたしはてつきりマリスたんはマリスなんのかと思つてたんだけど?」

訳：私はてつきりマリスは死神ではなくて、殺戮の天使なのかと思つてたんだけど？

俺は疲労を感じながら、それをマリスに伝えてやる。

おかしい。日本語同士で喋つてんのに、どうして通訳が要る？

「で、どうなの？ 殺戮の天使じゃあねえの？」

「……それは本来この現世で肉体を持たない私が、三次元下に存在するためにまとつた概念」

「スマン、わかりやすく言つてくれないか？」

「だからさ、兄ちゃん。幽霊つて体が透けてるじやん？ で、きっと死神も一緒なんだよ」

「透けてるじやん?」つておまえ、現物を見たことあんのかよ

「あるよ！」

俺が半眼でツッコむと、楓子は自信満々に答えた。

「触ろうと思つてもスカつて触れないし、死に別れたら恋人同士でも抱き合えないとんだよ」

マ、マジで!? なにげにスゲー体験してんな、こいつ……。母さんも靈感体質だし、こいつも血を引いてんのか……?」

「兄ちゃんが、一昨日一緒に見たじゃん!」

「日曜洋画劇場じやねえかこのボケ!」

「……楓子が正しい」

「正しいのかよ、マリス!?」

うわ……現実とファイクションを一緒にすんなつてツッコむところなのに、ツッコめなくなつちやつた……。

なんか、振り上げた拳の下ろしどころがないみたいな感じで、ムズ痒い……。

「……半分正しい。あなたたちからは、肉体を持たない幽霊や死神の姿は見えない。触れることもできない。声も聞こえない。幽霊や死神からは、あなたたちを見るとも、声を聞くともできる。でもやはり触ることはできない」

ふうむ、そういうものなのね。じゃあ、俺がイメージしてる幽霊にかなり近いな。

「で、その体が透けてたマリスさんが、あたしたちと同じような体をゲットしたってこと!」

楓子、おまえはほんとこの手の話の理解力はスゲーな……。

なんだ? 本を読む人は頭いいっていけど、こういう時は実感できるな。

こいつ、学校の成績はさっぱりだけど。

「……そう。このノートに書かれた設定を借りて、幽霊のような存在だった私があなたたちにも見えるようになつた。お互いに触れ合えるようになつた」

マリスが座卓の上に置かれていた妹のノートを指す。

「……ゆえに私も逃げた五体も、元々がどんな存在だったとしても、今はこのノートに書いてある通りの力と外見を持つて具現化した」

俺は慌ててノートをめくり……戦慄する。

改めて読み直すと、どの墮天使や聖天使もとんでもない化物だ。「聖天使メープルの【超究霸王滅閃】^{（ノック・オーナンザ・ブランズド）}は天空から一条の光を招来し、対象範囲を消失させる究極絶技で、東京タワーだろうと跡形もなく一瞬で消し飛ばす」とか平気で書いてある。

「マジかよ、とんでもねえ……」

ゴジラとガメラとキングギドラと、あと何かまとめて野に解き放つたようなもんだぞ、こりやあ。本当に逃がしてよかつたんだろうかとうすら寒くなる。

まあ、居座られる方が嫌なわけだが。

「ねえねえ、じゃあ逃げてつたメープルたんたちも、元は死神なの?」

「……違う。彼女たち五人は本物の幽霊」

「んー、つづことはあいつら元は人間で、死んだあと成仏できなかつた連中とか、そんな風に考えてオーケイ?」

「……オーケイ」

マリスがコクつと小さく頷いた。無表情なのに小動物みたいで可愛いなあオイ。なんだか胸の中を温かいものが満ちていくぜ。

……つて待てやコラ、俺。だまされてんじゃねーぞ、こいつは死神だつての！

「わかつても萌えるよね」

「人の心読むな、楓子」

「油断も隙もねえ。」

「あと、日本語は正しく使え」

「そのうち広辞苑にも『萌える』が追加されるよ。正しい意味で」

本当にそうなつたら世も末だな。

「で、これで話がつながったな。おまえら死神から逃げ回っていた幽靈のうち五人が、このノートの設定——概念？ を借りて、これ辛いと生き返ったわけだ？」

まあ、元の人間とは全く別の存在になってしまったわけだから、「生き返った」という表現より、「生まれ変わった」とした方がいいのかもしれないな。

「……あなたたちの単位で七時四十七分十五秒——強い妄執もうしゆうと聖なる炎もうしゆうという、相反する力が混ざり合う気配が感じられた」

うん、父さんがノートを火にくべたのがちょうどそのくらいだね。

「……その気配に引き寄せられた五人の少女の幽靈が、聖邪混沌せいじょこんとんの力を利用してノートの概念を身にまとつた」

なぜ妹のノートに書かれた天使たちが具現化したか？

その疑問に対する答えがそれだつた。

「あれ？ 幽靈ってたくさん逃げ回つてるんでしょ？ なんでその五人だけ、生まれ変わることできたの、マリスさん？」

「たまたま近くにいたから、とかじやねえ？」

「……距離的な近さも関係すると推測。しかし、心理的な近さが最大の要因と分析」「スマン、もっと簡単に言うと？」

「…………」

マリスが一瞬言葉を失う。平易な言葉で説明できないらしい。

「……彼女らは漫画とか、アニメとか、そういうものを著いぢめるしく愛好していた」

「要するに、その五人があたしのノートの素晴らしさを理解できたつてことじゃないかな？」

威張りくさつて解説する楓子。

「なるほど、そいつらがイタイタしいオタク氣質で、おまえの作ったアホ設定と相性よかつたつてことか」

「なんか言い方にトゲがあるんですけど？」

「トゲがあるように言つたしな」

「兄ちゃんの陰険眼鏡！」

「眼鏡なんかしてねえよ。両眼とも一〇だよ」

「いやあ、兄ちゃんってラノベだったら絶対眼鏡キヤラポジションだしさあ。『エレサー』で

言つたら八車智識？」

「ラノベと現実混同してんじゃねえよ」

「あ、舞子ちゃんに伊達眼鏡もらつてるから、兄ちゃん今から智識コスしよ？ 似合うよ？」

「いい加減なこと言つてんじやねえ!!」

前は俺のこと黒崎水城そつくりつて、散々おだてやがつた癖に！ どあれば、智識なんて陰険眼鏡野郎のコスプレやるかよ。冗談じやない。

激しく鬱陶しくなつて、俺は聖書の如きノートの角の固さを確かめると、

「他人が嫌がることはするなつていつも教えてるだろ！」

楓子の脳天に叩きつけた。

「ぎゃあああああ！」

たまらず、うずくまる楓子。黙らせるのに成功。

「信じらんない！ なんでそんなひどいことできるの!!」

「我が家には、『兄は何をしても許される』というルールがある」

決めたのは俺じやなくて兄貴だが。

ん？ 要するにおまえも散々いじめられた口なんだろつて？

その通りだよ……兄貴に勝てためしなんかねえよ、畜生……クスン。

「とにかくやめる。俺には人としての尊嚴がある」

「コスプレの遊び心が理解できないなんて、兄ちゃんは人生の八割を損してるなあ」

「今、俺、同情されたの……？」

「…………え？ 邪じやね？」

「でもまだ二割残ってるから。益栽でも楽しく始めればいいと思うよ？」

「おまえにだけは、上から目線で見られたくねえ！」

ぎやあすぎやあす

楓子と醜い兄妹喧嘩をしていると、

「……話を続けたい」

「すんません！」

マリスの髪の毛が首に巻きついて、俺は即悔い改めた。

「どうか今の俺のせい？ 楓子が脱線させたせいじゃね!?」

「……言い訳は聞きたくない」

「はい、そうですよね！ 男らしくないですよね！ さ、静聴いたしますんでお話を続けてください！」

マリスに脅されるまま、ヘコヘコするしかない自分が悲しい。

おかしい、俺は世界一平和な国に住んでいるはずなのに。どうして命の危機にさらされてるんだろう。どこで人生踏み外したんだろう。

ああ、俺の人生設計が……。幸せな家庭が……。八十歳大往生が……。

「……私たちは本来、現世には干涉できない。だから、私もノートの概念を借りた」

「ん。おかげでだいたいわかった。おまえはそいつらを成仏させるため、そんなイタい姿になつてまで追つてきたわけだ」

「イタいは余計。可愛いじゃんよ」

楓子に笑顔で太股を抓られた。座卓の下の見えないところで。

「いや、だつてその装飾過多の黒づくめ服とか、オプションの大鎌も堕天使の翼もイタいよ。普通にワンドレスとか着てりや、俺だつて可愛いって同意するよ」

俺は笑顔で妹の太股を抓り返した。

マリスが怖いので、これが互いの精一杯の攻撃だ。

「でもさー、せつかくあたしのノート通りなのに、マリスさんはメープルたんじやないの？」

「……？」

「つまりこいつが言いたいのはだな、このノートの設定通りに事が運ぶとしたらさ、追手であるおまえこそが女神の聖天使じやないとおかしくないか？ こいつの作ったイタストーリーだ

普普通にワンドレスとか着てりや、俺だつて可愛いって同意するよ」

俺は笑顔で妹の太股を抓り返した。

マリスが怖いので、これが互いの精一杯の攻撃だ。

「でもさー、せつかくあたしのノート通りなのに、マリスさんはメープルたんじやないの？」

「別にマリスたんが不満つてわけじゃないんだよ？ メープルたんじやなきやいやつてんじや

ないんだよ？ 純粹な疑問だからね？」

「わーかつたから、おまえは黙つてろ。誰もそんなことで責めやしねえよ。な、マリス？」

コクつとマリスが首肯する。

「たく……話の腰折つたら、また殺されそうになるだろが。

うなずいた後、マリスが疑問に答える。

「……聖天使は設定上最強の概念だったので、幽霊たちに先にとられてしまった」

「あ、そつか。早いもの勝ちで、強い順にとつていったのか」

頭いいな、幽霊たち。

「……だから、私は設定上一番弱い、殺戮の天使しか残つてなかつた」

「うん？」 急に黙りこくつてどうかしたのか？」

「そう言って、マリスが透明な瞳でじっと俺の方を見つめた。

「そう、「透明」と形容するに相応しい、何を考えているか読めない瞳。しかし、不思議と

「虚ろ」とは思わない。

「うん？」 急に黙りこくつてどうかしたのか？」

俺は訝しんで、楓子とアイコンタクトする。楓子もマリスが何を考えているかわからないようで首を振る。

「……これがどういうことか、わからない？」

「ごめん、さっぱり」

「……最弱と決まっている以上は、私一人ではどの堕天使にも勝てない。無論、最強の聖天使にも」

あ、そうか。俺と楓子はそろって手を打つ。

「……だから、私は『婚約者』が必要」

「ぱーとなー？」

俺はギクリとして、左手を逆の手で隠した。

左の手の甲には、小さな痣あざがくつきり残っている。あの不可抗力の乳揉み事件のおり、できたものだ。「仮『婚約』完了」の一言とともに。

「……私とともに戦い、力を与えてくれる人」

「戦う!?」へ、へえー。でも、別にそいつがいれば他の天使にも勝てるってわけじゃないんだろう?」

「……『婚約者』自身の資質にもよる。が、それでも困難と推測」

「ほら、やっぱり! じゃあ別にパートナーなんか要らないよな」

「……困難と不可能では天地の差がある。私は藁わらにもすがりたい」

で、でも、仮エンゲージつてことはまだ本当のエンゲージはすんでないんだろう? 交代可能

だろ?」

「そうだね、後は兄ちゃんが同意すれば正『婚約』になるよ! そうなれば交代不可だよ!」

まるで「よかつたね」と言わんばかりに教えてくれる楓子。

絶対後でぶん殴なぐる。

「……正『婚約』しよう、英二」

「いやいやマリス早まんなよ! 他のもつと強そうな奴探せよ」

「……じいー」

「待て待て待て! 俺を見つめるな! 困る!」

このノートの設定通りの化物たちと戦うだつて!? ザケンナ、命がいくつあっても足りそつ

にねえよ! そんなの絶対にごめんだよ!

ええい、何としてもこいつにはお引き取り願うしかねえな——って思つてたら、

「……協力を断つたら殺す」

マリスの【鋼糸籠陣】が首に巻きついた……。

「に、逃げたら?」

「……地の果てまで追つて殺す」

「で、抵抗したら？」

「……圧倒的な力の差で殺す」

「か、勘弁してくださいって泣いて頼んだら？」

「……聞く耳もたず殺す」

「何でそんな殺したがるんだよ？」

「……殺戮の天使だから」

「誰だよ、こんな設定作った奴!?」

「……楓子」

「デコ助！――――！」

抗議してももう遅い。

殺戮の天使に殺されるか、それ以外に殺される（可能性がある）か、究極の一択を迫られてしまった。

マリスは一旦髪の毛から解放してくれたが、その気になれば俺くらい秒殺できるに違いない。トホホ……。

「はいはいはーい！ 私はマリスさんに全面協力を約束しまーす！」

自分の家族に命知らずの勇者がいるって、生まれて初めて知ったぜ……。

「……ありがとう、楓子」

マリスがペコリと頭を下げる。こういう仕種だけ見てれば本当に可愛いのによお。

「もう！ マリスさんのお願いなら、あたし何でも聞いちやうよ！」

楓子は座卓の上に身を乗り出すと、マリスの首つ玉に飛びつく。

「お礼なんかいいから！ 体で払ってくれりやあいいからグヘグヘ」

そのまま押し倒して、キスの雨を降らしていた。

マリスはといえば、心なしか困惑顔になつていて見えた。けど、それは俺の先入観というわけで、無表情のままのかも知れん。ともあれ抵抗してないので放つておいた。

これがもし妹なら弟の乱行だったら、通報しなければいけないところだつたさ。

はあ、身内から犯罪者が出なくてよかつた。

女が女を襲うことに関しては、妹が持つ変態嗜好の中でも毒性値（俺がいかに迷惑をこうむるかの基準単位）が低い方なので、もうソッコまないぜ？

「んじやまあ、パートナー交代つてことでよかつたな。二人とも頑張れ。俺のいないところで」

「ダメだよ！」

俺は当然のことを言つたままでなのに、楓子が上半身を跳ね起こし、キスを中断してまで全否定される。

「何でダメなんだよ？」





「だつて、男じやないと『婚約』できなんだもん。そういう設定なんだもん」「それも設定かよこのクソヤロー！」
「厄介なノート作りやがつて！ 憤懣やるかたないとはこのことだよ、まつたく！」
「第一、なんで俺なんだよ？ 見るからに弱そうだろが！」
「……武勇が優れるに越したことはない。しかし、『婚約者』の資質とは無関係」「さつきから言つてるその……資質？ 具体的に何なんだよ？」
「……教えたら正『婚約』してくれる？」
「しねえよ！」

こつちや何とか回避できねえかつて訊いてんだ。その資質とやらが俺より優れてる奴いたら、紹介してやるからよ。

ああでも、聞いたら聞いたでまた藪蛇になりそうで怖いなあ。「背中に三角形のほくろがあるのが資質」なんて言われたら（実は俺にはある）代わりなんか見つかりっこねえしなあ。俺が弱り切つていると、マリスがまた透明な瞳でこつちを見つめてきた。

「……私には英二を選んだ理由がある。だから仮『婚約』を結んだ」
「できれば、そんな理由なかつた方がうれしかったぜ。
「……英二は大胆且つ勇気がある」
「あんな会つてすぐで、そこまでわかるもんかよ！」

「……家族を守るためとはいって、体を張つて飛びだす勇気の持ち主はそうはない」

「む……ん、そ、うか？　でもよ——」

「……私は感動した」

「や……まあ、そう言われると照れ臭いけどよ。俺もあんときや必死だったってだけで——」

「……英二はチヨロい」

「おだてるだけかよ！」

危うくだまされるところだった。ヤバかった。

俺は警戒心を高め、もう一度氣を引き締め直す。だというのに、

「なんで渋るかなー？　快く協力してあげればいいじゃん？」

このアホ妹は口からアホ言語を垂れ流す。

誰のせいでこんな目にあつてると思つとんじや。

どういう角度でノートを叩きこむと、このアホ妹に己おのれがしでかした罪おのれのでかさを教えてやれるんだろうな？　真剣に検討の余地ありだな。

「こんなドラマチックな事件、普通は望んだって起きないんだよ？」

「俺は勉強しなきやいけないんだよ。クラスの連中は塾たの夏期講習だの通つてんだぞ？」

だでさえ俺は、父さんたちの反対に遭つてハンデ背負つってるのに……」

父さんは頭古いからなあ。勉強は学校だけで事足りるつて未だに信じてるからなあ。

「兄ちゃん、世の中には勉強より大事なものがいっぱいあるんだよ？」

楓子がしたり顔で説教しやがる。

母さんに至つては、勉強してないで彼女作つて来いとかほざくし。
俺は質の高い授業と厳しい環境を求め、高校はいわゆる進学校を選んだ。だからほんとついていくのに大変なんだよ。まだ高一だからって言つて言つてられないんだよ。

「これ以上、後れをとつてたまるか。今日だつて涼しいうちにやつときたかったのに……」

「兄ちゃん、世の中には勉強より大事なものがいっぱいあるんだよ？」

楓子がしたり顔で説教しやがる。

そりや俺だつてなあ、勉強だけが唯一絶対のもんだつて言う気はねえよ。ここまでバカじやねえ。ダチも作らず机にかじりつくとか、家族が熱出してんのに無視して宿題するとか、恐喝きょうかつした金で塾に通つとか、そういうことはしねえよ。

「だけど、少なくともマリスと波乱万丈ばらんばんじょうやるのが、勉強より大事だとは思わねえ」

一般市民の感性持つてれば、誰だつてそう思うさ。

」(・・・)「

とりあえず考える時間をくれ——

俺がそ、う頼んだら、意外にもマリスはコクつと頷いた。

激しく反対されるかと思っていたから、肩透かしだった。そうしたら理由も教えてくれた。

「……逃げた墮天使たちの捕捉^{はそく}にも時間が必要」

無表情なのに、心なしか無念そうにマリスは言った。なるほど、まずはあいつらを探しださんことには切つた張ったは起きないし、だったらそれまでパートナーの出番もないわけだ。

ちなみに、じやあどうやつて探すの？——という疑問にも無念そうに答えてくれた。

「……私たちは一定以上の魔力を使用した場合、その波動は現世の隅々まで行き渡る。その魔力を感知できるまで捕捉は不可能」

という設定が楓子のノートに書かれているらしい。つまり、逃げた連中の誰かが暴れだすの手をこまねいて待つしかないわけだ。こりやまた厄介な——いや、俺からすれば好都合な設定だな。楓子にしちゃ粹^{さい}じゃないか。褒^ほめてやつてもいいね。

「……それまで英二はゆっくりしていい。でも、それまでには決断しておいて欲しい」マリスは最後にそう付け加えた——という顛末^{てんまつ}である。

まあ、決断なんてする気はないけど。とまれ時間稼ぎに成功。

どうすべえかと悩んでいると、昼が近づいてきた。

うちは山林の中にあるから割合過ごしやすいんだが、それでも暑くないわけじゃない。

「てか、おまえはそれ、平気なの？」

座卓の向こうに正座したままのマリスに、俺は頬^あをしゃくって見せる。

黒づくめってだけでも暑苦しいのに、下に着てるシャツも首のところまでビチッとボタンを留め、ネクタイまできつちり締め、見てるこっちの方が汗だくになりそうだぜ。その上、楓子がウザいくらいじやれついているので暑さ倍増。もし俺がマリスの立場だったらキレる十五歳と化して、血の海に沈めていたかもしれない。

「……暑い」

やつぱり墮天使でもしんどいらしい。表情が涼しげなのでわかりづらかったが。

「じゃあ、脱いだら？」

「……わかった」

マリスがシュル^ルっと不^クタイを外した。次いで、ごそごそと黒い上着を脱ぐ。それからシャツの襟首の第一ボタンに手をかけ、第二ボタンに手をかけ、第三ボタン——

「待てやあああああ

「……？」

「小首傾げてもダメ！ なんでシャツまで脱^だうとするんだよ！」

「……あなたが脱げと言つた」

「全部脱げとは言つてねえよ！ 察しろよ！」

「……難しい」

どうもマリスは言葉の綾^あとか読みとるのが苦手な奴らしい。

天使どもは皆そなぬのか？いや、違うか。他の五体は元は人間つて言つてたもんな。マリスだけは外側も中身も人外。だからか。しち面倒な奴。

「……脱ぐのはダメ？」

「百歩譲つて大胆開襟まではいいよ！はしたないけどな！暑いしな！でもその下までは

だけるのにはダメ！」

「……わかった」

マリスは第二ボタンまで許してくれた。ともすればプラチラしちやうが、そこは俺が努力して目を逸らせばいい。いやー、俺つて紳士。日本男児。

「兄ちゃん、兄ちゃん！マリスたんは下着も黒かなあ？」

「てめえはちつたあデリカシー持てや！」

「テヘ」

楓子は自分を軽く小突き、舌を出した。まるで悪びれてない。

「……確かめる？」

「何を仰つてるのかわかんないなアハハ」

この殺戮の天使さんは青少年が日ごろどれだけ飢え、且つその渴きを抑えることに苦心しているか知らないことだけはわかつた。

なんて心臓に悪い。ドッキンコドッキンコうるさい胸を宥めるため、俺は素数を1から数えなければならなかつた。

「つうかさ、楓子。おまえ、なんなのよ？普段はさんざん俺のこと好きとか冗談ばかり言つて。マリスにベタ惚れじやんよ」

俺は話題を逸らすために、からかい口調でそんなことを言つてみた。

いやいや決して拗ねてんじやねえんだ。これはいい傾向なんだよ。楓子がどういう氣で俺のこと好き好き言つてんのか窺い知れねえが、実の兄相手に不毛極まることは違ひない。

これを機会に兄離れして欲しいし、他の奴に目移りするのは決して悪くないことだろ？ん？女同士じや結局不毛には違ひないだろ？

いいんだよ。俺が迷惑こうむらなくなるんだから、知つたこつちやねえよ。

なーんて内心ほくそ笑んでたわけよ。

「あれー？兄ちゃん、マリスたんにあたしをとられそつてジエラシー？」

そしたら、楓子がニタアーツと小悪魔みたいな笑みを浮かべた。

「は？」

俺はその顔面目がけて座布団をぶん投げた。チ、かわされたか。

ムカつくんだよ、その「してやつたり」つて顔。

しかもマリスの野郎がよ。俺たちの顔を交互に観察した後、ボソつと言いやがつたのよ。

「……近親相姦？」

「なんでそんな言葉知つてんだよ!?」

ああもう、今日は朝から大声出しまくって喉が痛いぜ。

ただでさえツッコミどころの多い奴がいるのに、それが一人に増えちまつた。

「ん？ 待てよ……」

ツッコミどころといえは俺はさつきからずつと、かなりきつい語調でマリスにツッコミまくつてしまつた。正論を唱え続けたのだから俺は何も悪くないが、今までのパターンだとマリスが「……私に説教したら殺す」とか言つてきそなものだ。

だが、それがない。

不合理な理由で殺しはしないとマリスは言つた。きっとその通りなんだろうな。腫れものに触るようにピクピク快える必要はないのかもしれない。

うむ。だんだんマリスとの接し方がわかつってきたような気がする。

「楓子、おまえの服貸してやれよ。涼しい奴」

だから、そんな言葉も気軽に出てくるつてもんよ。

「無理無理。頭半分違うもん」

「む、そりやそうか」

それだけ身長差があると、服のサイズも合わないわな。

「でもまあ、下着はあたしのでいいかなー」

楓子が好色な視線で、マリスの体のラインを上から下まで舐め回すように見る。

起伏の乏しいラインを眺めて何が嬉しいんだか、こいつは。

「理子さんなら、マリスたんと同じくらいだったのにねー」

「む……理子か……」

ちなみに理子つてのは俺の幼馴染ね。よろしく。

山本家は吉岡家の近所さんで、そこ理子、舞子姉妹はそれぞれ俺、楓子と同い年。昔から家族ぐるみでつき合いがあった。

「あいつらが東京に行つてなきゃなあ……」

理子のご両親はファッショングループの仕事をしてて、エライさんになつちまつて去年から東京の本社勤務をしている。うん、理子は妹とお手伝いさんと三人で暮らしているんだ。で、この夏休みを利用して、姉妹で東京観光がてらご両親のところへ行つてんだよな。

「間が悪いな」

いたら、服くらい喜んで貸してくれただろうにさ。

「どうすつかなあ……」

「服ならワシが買ってやろう」

いきなり襪が開いて、父さんと母さんが姿を見せた。

び、びつくりさせんなよ、黒親父。死んだふりしようかと思つたじやねえか。

「と、父さん、もういいの!?」

「うむ、優子さんの看病のおかげでな」

俺は絶句するしかなかつたね。

自目を剥くほどの重いギクリ腰からもう立ち直つたらしい。この父こそ真に化物じみているつて奴よ。そう思うだろ？ いやあ、一連の異常事態やマリスともそれなりにつき合えているのは、常日頃からこの妖怪のおかげで慣らされてるからかもな。俺はそう確信したぞ。

「パパ！ あたしには？」

「何だ、楓子？ 小遣いの前借りがしたいのか？」

「ぶーケチ」

そんな甘い親父じやねえつていい加減悟れよ。

「だが、その前に話がある。いいかな？」

父さんが訊くと、マリスがコクつとうなずく。

「ちょうどお昼だし、ご飯を食べながらにしましょ」

母さんが手を打ち、俺はマリスを台所へ案内した。

「――というわけで、私は逃げた五体を追わなくてはならない」

台所でマリスが、さつき俺が聞かされたのとほぼ同じ話をし終えた。

二度手間を面倒くさがることはなかつたし、無表情で淡淡と語る姿はけつこう真摯に映るもんだ。父さんは真剣に耳を傾け、母さんは料理をしながら何度も相槌を打つていた。

「そうか……あの怪異はそういう事情だつたか」

深く得心がいったのだろう、父さんが腕組みしたまま一度、大きく頷いた。

「マリスちゃんと言つたか……君の小さな双肩にはそれほどの重圧がのつてゐるのだな

「……彼女ら五体は強敵」

父さんが目頭を押さえる。感極まつたらしい。

マリスが少女の姿をしているのは、あくまでそういうノート上の設定だからじやねえの？

本質的には父さんが思つてるような、か弱い存在じやねえだろ？ と俺は思うわけだが、言わずもがななので黙つておいた。

「いいだろ、好きなだけうちにいなさい。ワシも協力は惜しまない。楓子、後で空いている部屋をマリスちゃんが使えるよう、片づけてやりなさい

「やつた！ パパ話せる！」

楓子がマリスと手を取り合つて喜ぶ。もつともマリスはされるがままに、腕を振り回されているだけだったが。駆け込み寺つて言葉があるじゃない？ でも、うちの神社だって昔はよく家出少年を保護し

113 第三幕 (殺戮の) 天使がうちにやってきた！

たものよ」

「最近はめつきりなくなつたがな」

母さんがカツオ出汁の味見をしながら懐かしそうにし、父さんがうなづく。ともかく余所様の子（子か？）を受け容れる体制はできるつてこと。

「……ありがとう。こんなによくしてもらえて、私は運がいい」

マリスがぺこりと頭を下げる。

こいつ得だよなあ。感情を抑えた喋り方をするので、かえつて全く社交辞令に聞こえないんだよ不思議。これには父さんも母さんも気を良くしたようだつた。

「うちの子になつたと思つて、何も遠慮要らないからね、マリスちゃん」

母さんが料理の手を止めてワインクし、父さんがウムと同意する。

「こんな可愛い娘が増えたら、私たちも嬉しいわよね、あなた」

「ああ、悪くないな」

「子どもは多い方がにぎやかだものね、あなた」

「うむ、その通りだ」

「じゃあ、今夜もう一人作る？」

「ゲホゲホゲホゲホ、ゲホン！ ウオツホン！」

父さんがいかつい顔を耳まで真っ赤にして、咳払いで誤魔化した。

俺は聞かなかつたことにしてやつた。武士の情けつて奴よ。でも楓子は「ヒューヒューラブーい」と冷やかした。あ、バカめ……。
「親をからかうとはいひ度胸だ、楓子」
「ひいひDV反対！」

楓子が父さんの拳骨(けんこう)をもらつて泣く。おまえはほんと懲りんな……。

今、母さんは料理中だし、咲嗟(さきばら)には動けないし、さりげなく助けるなんて無理だぞ？
そして、そんな吉岡家一同を見回しながら——
「……やはり私は運がいい」
マリスがそう小声で呟いたのを、俺は聞き逃さなかつた。
無表情のマリスの透明な瞳に、なんだか温かい光が宿つたように見えたのは、俺の錯覚だろ
うか？ マリスが一瞬まとつた印象的な空氣だつた。
思わず、見惚れてしまうほどに。

「うふふ」

母さんの笑い声で、俺はを取り戻した。いつの間にか料理の手を止めて俺の傍(そば)に来ていって、耳打ちしてくる。なにもかもわかつてます、みたいな嫌らしい顔で。

「あんたには冷や冷やさせられたけどさ——
「何がだよ？」

母さんの笑い声で、俺はを取り戻した。いつの間にか料理の手を止めて俺の傍(そば)に来ていって、

「いつまで経っても妹離れできないし——」

「ふざけんな。あいつが兄貴離れできないんだよ」

「理子ちゃんとは全然脈なしだし——」

「俺たちは厚い友情で結ばれてるの。下衆な考え方はやめてくれ」

「ほら、お母さん正統派ラブコメ好きでしょ？ 禁斷の愛とか胸が痛んでダメなの。だから、この子は本気で妹に恋してるんじやないかとお母さん心配で心配で——」

「ついでに明日空そらが降つてくるんじやないかと心配してたら？」

「とにかく、いい子が来てくれたわねって話よ。頑張んなさいよ。 正統派ラブコメ」

「頑張らねえよ！ 何も！」

「あんたがお嫁さんにもらつたら、戸籍こせき上じょうも娘になるじやない」

「そもそもマリスに戸籍なんてものはない！」

この母はちゃんとマリスの事情を理解できているのかと、不安になつた。

俺は妹及びマリスのせいでワケノワカラニ事態に巻き込まれただけで、母さんが思うようなラブコメ的シチュエーションが発生しているわけではない。

そもそもマリスは人じゃない。

可愛いと思うが、そこは線引きして考えるべきだろが。なあ俺、間違つてるか？ マリスに

したつて恋愛感情なんて情動を持つてているのかどうかも怪しい。

でも、言いたいだけ言つて母さんは満足したのか、料理に戻つた。

父さんの看病で飯を炊く時間がなかつたので、お昼はうどんだ。それに野菜と小エビの搔揚かきあげ

をたくさん添える。

「ところで話は戻るが——」

天ぶらが揚がるのを待つ間、父さんがマリスに問う。

「その堕天使と聖天使は実際問題どうなのかね？」

「……どうとは？」

「危険なのかね？」

マリスはコクつと頷いた。それで父さんは「もう」と深刻な顔で唸る。

「……これは私たちにとっても前代未聞の事件」

まあ、そうだろうな。幽霊が生き返るとかありえねえよ。

「……本来成仏する運命にあつた彼女らが、全く別の存在に生まれ変わり、しかも超常の力を

手に入れたとなると、いったい何をしでかすかわかつたものではない」

「おどおどるべすなよ」

「……脅すなどと無意味なことはしない。私も私の推測が外れることを願つてゐる」

「そ、そういう言い方されると本気で怖いじゃねえか……」

「で、その堕天使と聖天使を——」

「いちいち分けて呼ぶの面倒じゃない、父さん？」

「一体だけ堕天使じゃないのが混じっているから、ややこしいんだけどな。では何と呼ぶ？」

「はいはい！」

楓子がシユタツと拳手した。

「『A·N·G』と書いて『アンジェ』と呼称統一するのがいいと思います！」

「何で A·N·G？ 天使が英語で angelだから？」

「『Avatar of Nolite Girls』の頭文字をとつて『A·N·G』だよ、兄ちゃん！」

「あ、あば……？」

「『Avatar of Nolite Girls』。意訳すると『死せる乙女たちの外装』かな？」

「なんでそんな英語がスラスラ出るのよ……。中二病患者つてすばい。

それを英語の成績に活かせないの？」

「ま、まあ、それでいいんじゃねえの？」

何かイタイタシーイ名前をつけられるよりは、楓子の提案にしては毒性値低いな。

アンジェなら人の名前だし、どつかのバンドでいそう。呼ぶのに抵抗はない。

「その A·N·G を生みだしてしまったのには、ワシも責任がある」

「……京平には靈的な力を全く感じない。いわば靈的純潔ともいうべき存在の手により聖邪



混合の儀式が行われたことで、A·N·Gたちが生まれる可能性が高まつたのかもしれない」

やつぱ呼びやすいのか、すぐに定着した。

「わかつた。ならば、ワシがそのパートナーになろう」

「さすがパパ、かつこいい！」

「おお……」

俺も心底感嘆した。この父ならば戦闘力でも申し分はない。確か、強いに越したことはないんだろ？」

「その上、俺は助かる（こ）一番重要。

「ダメーーーーーーーー！」

せつかく喜んでたのに、母さんが力いっぱいダメ出しした。

「な、なんでだよ、母さん？」

「ダメ！ 浮気なんかダメ！」

「ま、待て、優子さん！ ワシは浮気など——」

「しかも、ついさっき娘みたいなものつて決めた子相手に不潔だわ！」

「母さん、冷静になれよ！ これは浮気なんかじゃないって……」

「いーやーなーのー。京平さんはあたしのものじやないといーやーなーのー」

「どういう理屈だよ……」

「とにかく、いやーなーのー! 誰にも渡さないのー!」
拗ねて唇を突きだし、駄々をこねる。ほとんど幼児だ。普段の母親然とした雰囲気が消し飛び、ある意味一人の女になつてゐる。

「さつき父さんの決断褒めてたじやねえか、コウモリ野郎」

「あたしは刹那の自分に正直だからいいの！」

お母さんたってそんよ！ たがりいじやーなーのー

「どうしてかといふなら、このあと

「……いいけど、俺は奇子に座つこよま、式へこ爪むごチヨコノヒ母さん」

「ひぎいいいいいい」

ひつくり返った。母さん超打たれ弱い。
えいじ

「家庭内暴力とはいって度胸だ、英二！」

すかさず父さんの鉄拳——億倍の家庭内暴力が飛んできた。

うあ……出てる出てる……目から星出てる……アハハハ。

「やだー！やだー！やだー！やだー！」
ぐくふう 転率なことしゃまつたせ
猛省しよう

その間にも母さんは駄々をこね続ける。ひっくり返ったまま両手両足をバタバタさせる。もうこうなつたつ風子と一緒に手がつかうれない。やはり血か。

「わ、わかった、優子さん。撤回する。撤回するから、許せ」

父さんの謝罪を聞き、母さんはムクリと立ちあがると、父さんにぴったり寄り添う。

……キスしてくれたら許す

「冷めたんだ……マリスちゃんを見た途端、私の愛が冷めたんだ……」

「ち、違うぞ！ 断じて否！ ワシは世界一優子さんを愛している！」

「じゃあ、証拠……」

【わが家】
黒みたまオツサンがもじもじしながら、拗ねた母さんの唇にチユツとキスする。キモい。

「というわけ。ごめんね、マリスちゃん」

母さんが母親の顔に戻つてマリスにウインクする。マリスもコクつと了承する。

「何が『すまん』だよ、父さん!」

「なんでそんなに母さんの尻に敷かれてるんだよ？」

「普段威張つてんだから、毅然としたとこ見せろよ。父さん、マリスに責任感じてるんだろ？
だつたら母さんなんかうつちゃってパートナーになれよ」「ぐもう、しかしそれは……」

「賢いからこの家でワシに逆らつたらどうなるか、わかるだろう？」
「死ね、クソオヤジ！」
「いい度胸だ」
「ハンマーのようなゴツツイ拳骨を、脳天に打ち落とされた。
「ひでええええええええええええええ」

俺は頭を押されてテーブルに突っ伏す。

目から星だけじゃなくて、涙までボロボロ出た。
なんだってんだクソウ。俺は父さんにだけは従順にしてたのに。品行方正に生きてきたのに。
今日になって理不尽なことばつか起こりやがつて。父さんに従つても逆らつても地獄じゃねえ
か。どうしてこうなった？ どうしてこうなった？！

「てかさ、「この家でワシに逆らつたら——」だあ？ 母さんには頭上がらないくせに」
もうヤケだ！ こうなつたら前から思つてたこと、全部言つてやる！ ゲレテやる！
でも、母さんに聞こえると面倒なことになりそんなんで、小声でね。

「なんでそんなに母さんの尻に敷かれてるんだよ？」

にわかに雲行きが怪しくなり、俺は思い切り眉をしかめた。

「息子の義務としてワシの代わりを立派に務める。わかつたな？」

「わかりません、父さん」

「歯をくいしばれ」

「わかりました！」

汚い！ 父親の権威汚い！

俺は心の中で罵つたが、こういうの負け惜しみでしかねえよな、畜生！

「いや、ちょっと待つてくれ。いくらなんでも無理ありすぎだろ？」

「どうして無理だ、英一？」

「俺、父さんみたいにケンカ強くないし、代役なんて務まらないって」

「じゃあ、今から強くなればいい。毎日巻き藁百回突け」

「それに父さんみたいに丈夫じゃないし。ゴホッゲホッケヘツ。ほら、咳が。朝から体調が悪

くてさあ」

「ああ、バカがひくという例の……」

「墓穴掘つた！ いや、夏風邪のあれは迷信だって」

「だろうな。それにおまえは賢い子だ。決して馬鹿ではない」

「……父さん、嬉しいよ」

「う、うるさい。おまえだつてワシの血が流れているんだ。そのうちわかる。女に逆らっても仕方ないんだと、そのうち諦観ができる」

「わかんねえよ。できねえよ」

「いいや、おまえもワシの子なら女に弱いはずだ」

「情けねえこと断言しないでくれよ」

「やれやれだぜ」とか言いながら、結局女のワガママを聞いてしまっような男になる」

「絶対にならねえよ」

「クスクス」

「なに意味深に笑つてんだよ、楓子!?」

父さん（+飛び入り参加の楓子）相手に俺がケンカをしていると、ふとマリスと目が合った。

「……やはり私は運がよかつた」

「うわあすげえ舐められた気がする！」

「……ありがとう」

マリスがぺこりと頭を下げる。父さんに。そこは俺にではないのかとかなり不満だぞ。しかし、まさかこんな形でパートナーになれと強要されるとは思いもしなかった。

「何とかならないのか、楓子？ 後生だ」「んー。よく考えたら、ならない」

「何ですよ？」

「忘れてたけど、『婚約者』は十代男子に限るつてノートに書いてた。テヘ」

楓子は自分の頭を小突きながら、舌を出す。悪びれてない。

「「それを早く言え！」

その脳天に、俺と父さんは脊骨を振り下ろした。

おお、さすが俺たち親子。ナイスツープラトン。楓子なんか一撃（二撃?）で撃沈だぜ。けど、八つ当たりにしかならんよな、これ。結局は俺にしか白羽の矢は立たないのか？ 泣きたいのはこっちだぜ……ぐす。あ、ほんとに泣けてきた。

俺はやるせなさで、楓子が痛みでメソメソしていると、

「そうと決まれば、英気を養わなきや。いっぱい食べてね」

母さんがうどんと大皿に盛られた搔揚をテーブルに運んできた。

「まだ決まつてねえよ！」

なんで誰も彼も既定事実にしちゃうわけ？ もう自棄食いするしかねえよ。

出汁も効いてるし、天ぷらもサクサクで美味しいなあ！

もしパートナーを引き受けたら、これが最後の母さんの手料理になるかもしけねえしな。そ

う思うと美味しさがひとしおだよ！

——なんて、俺がヤサグレながら貪つてると、

「……おいしい」

マリスも同じくらいのハイペースでついてきていた。
「遠慮つてものを知らないのか？」

散々振り回されていることもあります

「…………」

母さんに差しだそうとしていた空っぽの丼を、マリスは無言で引っ込めた。無表情のままなのに、心なしかしょげているように見える。

う、嫌みがすぎたな……。すまん、後悔。

「もううちの子なんだから遠慮なんかしなくていいんだよ、マリスたん！」
じんじん茹でるし、⁽¹⁾

どんどん揚げるから好きなんだだけ食べてね

楓子はもう一度「テヘ」と自分を軽く小突き、舌を出す。

「でも、楓子の言う通りだからね、

「……ありがとう、楓子。優子」

母さんがうどんのお代わりを注ぎ、マリスが無表情のままじゆるじゆると音を立ててすする。風子がその食いつぶりをキラキラした目で眺めている。

まさに「團欒」というべき光景に、俺は一人ばつが悪くなつてそっぽを向く。

「マリスちゃんを歓迎するという、ワシの決定が気に食わんとはい度胸だ」

反抗期真っ最中の少年のように、親父

ちくしょうううううううううううううう

昼食後、俺は楓子とマリスと一緒に居間へ戻った。

俺が自室に戻らなかつたのは、

……お願い。傍^{そで}にいて

「え!?」

「馬鹿が言つて」

「ま、ま、なんぞよ、急ご?」
相変わらずの無表情だったが瞳が心なしか潤んでいて、妙に色っぽくて俺はドギマギした。

どうしてこんな白三秒前のカツツルみたいなことになつてんだ? いつからマリスは俺のことをつぶやく。原因は、白川りりやんこと、当然のことだ。音痴十郎となつた。

「……お腹いっぱいで苦しい。吐きそう」

「ただの食いすぎかよ！」

俺のこのトキメキを返せ

卷之三

小声でぼそぼそうめきながら、マリスは畳の上にゴロンと横たわった。

そんなに無理に胃に詰め込まなくともよかつたのによ。俺はこの殺戮の天使の考えているところがよくわからない。

「おまえ、二年生の、こ

ほんとわからな
い。

「……じやあお腹でもいい」

卷之三

すつげえ苦しそうだし、それで楽になるならしてやるべきか？ 陣痛に苛まれる妊婦さんのお腹をさすつてあげるなんてのはよく聞く話だし、看病する側に疚しい気持ちなどないはずだ。

卷之三

のお腹をナデナデして、妙な気持ちをもよおさない自信はあるか？
正直ない。参ったな……。

一
七

「つらつしげず。」土方久

俺はマリスの傍らにしゃがみ——

「い」
「櫛子の容赦ないハリガシ日を食らつた

いきなり何しやがんだテメエ!?

「兄ちゃん、そんなのずるい！ ヒイキ！ ヒイキ！」

「何がハイギガ!!」

そればかりの國なら通じる理由は……?

「もういい……怒るのも疲れた。おまえが代わりにマリスをさすつてやれ」

楓子が手をワキワキさせながらマリスに迫る。

「……楓子の意地悪」

マリスが心なしか恨めしげに言つた。しかも口とは裏腹に、俺の方見て。何ですよ？

「クク、こつちや生まれた時から寝つけんのよ。マリスたんでもそう簡単には渡せんなあ」

楓子が不敵に笑つた。何言つてんの、こいつ？

しかも、気のせいか二人の間で火花散つてる。

？？

「まあでもそれはそれとして、さすつて欲しいよね、マリスたん？」

「……お願い」

楓子がマリスの懇願を聞いてやつてた。

「ウへへ、ねーちゃんエエ腹しとるやんけー」

「……楓子。もつと優しくして」

「ワシヤ激しいのが好きじゃんのー！」

なんだ、やっぱりこいつら仲良いんじやん。百合百合じやん。

ちよつともつたいた氣もするけど、ちゃんとさすつてやれよな、楓子。

「マリスもさ、マジで吐きそうになつたら言えよな。洗面器持つてきてやるから。おまえ 無表情だから自己申告してくれねえと全然わかんねえぞ？」

「……わかった、英二」



「そもそもその無表情をもちつと何とかできんのか？ 愛想ふりまけとまでは言わんけど」「しようがないよ、兄ちゃん。マリスたんはクーデレだもん」

「はあ？ クーでれだあ？」

俺は胡^{うざんくさ}臭いものを見る目つきで楓子を見た。

「知らないの？ 普段は無表情無愛想のクールビューティーなんだけど、フラグたつてデレたら笑顔を見せてくれる女の子のことだよ」

「知らんし、言つてる意味がさっぱりわからん」

「一般常識だよ？」

「それだけは嘘だと断言できる！」

「普段は冬の女王のような彼女が見せてくれる、小春日和^{こはるびより}のような笑顔！ その温かさ！ このワビサビがわからないなんて、兄ちゃん日本人じゃないと思う」

「はん、アホくさ。そんなメンドクセえ女 現実にいたらこつちから願い下げだね。疲れるだけだ。いつでも笑顔でいてくれる子の方が絶対可愛いに決まつてら」

この意見にはぶつちやけ自信がある。きっと十人いたら十人賛同してくれるはずだ。

「そうだろ？」

「なあ、マリス。試しにちょっとでいいから、笑顔作つてみてくれないか？」

「……わかった」

寝転がつたまま、マリスが無理矢理笑顔を作ってくれる。

「……これでいい?」

顔面の筋肉を使って強引に口の両端を吊りあげた、鬼瓦みたいな笑顔だった。コワい。

「ぶふつ。ごめん、むしろ俺の方が笑え——」

「……それ以上笑つたら殺す」

「——たりはしませんよ、うん」

動けないマリスとは別の生き物のように【鋼糸鑿陣】が首に巻きついて、俺は口を開ざした。

「……疲れた」

マリスが無表情に戻る。ありがと、もう充分。こいつの笑顔は全く期待できんな。

しかし、よ——

クーデレうんぬんはともかく、こうしてマリスとダベるのは悪くなかった。殺戮の天使と一緒にいるつつうトンデモな状況に慣れつつある。

パートナーになれとか戦いだとか、殺伐とした話は今でもごめんだ。けどよ、こうして普通にマツタリすごす分には、別にいてくれていいんじゃないか? ああ、そうさ。歓迎してもいいって気分になっていたわけさ。俺は。

「ねえ、マリスたん。服の前、完全にはだけた方が楽になるんじゃないかな? あとスカートもベルト抜いて、少しほだけたら? グヘグヘ」

マリスを看病する楓子がドサクサに紛れて、ただれた欲望を剥き出しにさせる。

困った奴だがこの妹もマリスが来て、浮かれてはしゃいでいるのだとよくわかる。

「……わかつた、楓子」

「ダメだつつの。おまえら、ここに男がいるつてこと考えろよなー」

二人にツッコむ声も、自分でびっくりするほど柔らかい。

こういう和やかなムードは、うん、いいな。

「ちょっと参考書とつてくるわ」

俺は自室から勉強道具一式をとつてきて、座卓の上に広げる。

「ウへ。兄ちゃん、こんな時まで勉強すんの?」

「こんな時もそんな時も、いつだつて勉学に励むのが学生の本分。朝の遅れを取り戻さんと」

「兄ちゃんのガリ勉眼鏡」

「誰が眼鏡だ、誰が」

「裸眼二・〇だつて言つてんだろう?」

「でも、そんなとこもステキ」

右手でマリスをさすりながら、左手で投げキッスしてくる楓子。

俺は真摯な気持ち込めて、蝶^{はえ}でも追つ払うジエスチャーで応える。

「おまえ、わかつてんのか? 兄貴は神社継げるからいいけどよ。俺たちは——いや、待てよ。

この言い方は卑怯だな。兄貴はちゃんと勉強して、いい大学行つたもんな」とことあることにいじめられたクソヤローだが、見習うべきところには敬意を払わないとな。

「じゃないと俺、いつまで経つても兄貴に追いつけねえよ……。

「とにかく、俺たちには何も残らないんだぞ？」勉強して、いい学校行つて、社会に出て、自立した大人にならなきやいけねえ。その自覚持つてんのか？」

中学生相手に何言つてんだと思うだろ？ その意見もわかる。だが、俺だってこのちやらんぽらんすぎる妹の将来が不安なのよ。だから、これは愛の鞭つてもんさ。

別に俺みたいにガリ勉しろとは言わんよ。遊ぶ時は遊ぶべき。ただ、こいつは一学期に赤点とりまくりだから、夏に挽回しどかないと二学期もヤベーんじゃねえのって話。

「ちゃんとわかつてます！」

「ならないけどな」

「あたしは兄ちゃんに養つてもらうからいいんですー」

「オイ、待てや」

「おまえは何か？」親だけじゃなくて兄の脛もしゃぶり尽くす気か？

「そうじやなくてえ。ま、法律上は結婚できないけどおー？ 事实上ならグフフだしい？」要す

るにあたしのために頑張つてね、ダーリンつて話♥』

「おまえが何を言つているのか、さっぱり理解できん」

おかしいな。俺、国語もそんなに苦手じゃないんだが。

「……英二は勉強好き？」

楓子が頑張つてる甲斐あつてか、幾分顔色のよくなつたマリスが訊いてくる。

「正直、好き……ではない」

クラスじや何人か好きつて奴いるけどな。しかもボーッとかじやなく、本氣で。
「でも、やらなきやいけねえからやる。明日のためなら今は堪えなきや」

明るい未来と笑顔の奥さんと幸せな家庭のためにな。

「……その考え方はどうでも合理的」

「だろう？」マリスならわかつてくれると思つた。

「……頼もしい」

なんか、褒められた。無表情だから、全然そう思えないけど。

「何が？」

「……本来の資質とは関係ない。しかし、『婚約者』はより賢明な方が理想的。その上、現状を見据えて試練をよしとする精神を持つている。英二、やはりあなたと『婚約』したい」

「おまえ、何でもいいから俺を持ち上げて、その結論に持つていきたいだけだろ？」

「……バレた」

このクソヤロウ。淡淡と言いやがつて。全然悪びれてねえ。

楓子みたいにチロツと舌でも出してみろよ。おまえがやつたらさぞ可愛いだろ？ ゼ？ しゃあねえなあ許すかつてなると思つぜ？

そうだよ——

マリスが普通の女の子でさ。別の出会い方してさ。クラスとか一緒になつてさ。もうちよつと普通に笑顔を見せてくれたりしたらよ。俺なんか、きっと一発で惚れたに違ひねえぜ？ 恋愛より勉強つてボリシーも返上してたかもつたいねえ。ああ、もつたいねえ。でも、世の中そんな甘くねえ、ままならねえってのが現実つてもんだよな。俺らは地に足をつけて生きなきゃいかんわけだよ。

さ、次の問題解くか……。

あるいは現在進行形の黒歴史 —殺戮天使が俺の嫁？— 試し読み体験版

発行 2010年8月31日 初版第一刷発行

著者 あわむら赤光

発行人 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒106-0032

東京都港区六本木2-4-5

電話 03-5549-1201

03-5549-1167(編集)

装丁 株式会社ケイズ(大橋 勉／彦坂暢章)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。

定価はカバーに表示しております。

©Akamitsu Awamura

Printed in Japan

GA文庫

